北村（きたむら）　敏治（としじ）さん

浜松市街路樹愛護連絡協議会
（西丘を住み良くする会街路樹愛護会）

[北村敏治さん]
浜名湖にある、日本初の湖上ロープウェイをもっと活用すべき。

●政令指定都市に相応しい中心市街地を！

バブル崩壊後、大企業等の市外流出が続いたことで、下請けや中小企業が倒産したり、雇用が大きく減った。リーマンショック後の外国人労働者の帰国などと併せ、労働者人口が大きく減ったと実感している。

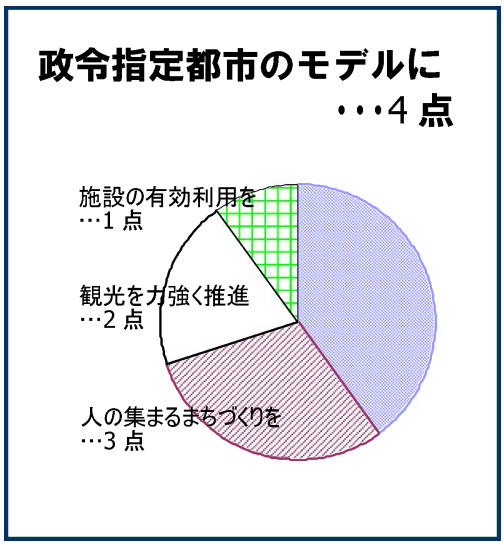
また、郊外に大規模な住宅地がたくさんできたことで、人口が郊外に移動し、中心部が空洞化している。政令指定都市として、中心市街地の活性化は、重要な課題であり、静岡市の例などを見ても、商業やサービス産業を中心市街地に誘致させることが必要ではないか。

それとともに、他の政令指定都市での成功例を見ても、中心市街地に車の乗り入れを制限し、バスや電車を市民が利用することで、中心部を人が歩くまちづくりを進めるべきと考える。

●中山間地域の空き施設を活用した、市民の交流促進を！

合併後、浜松は、広大な面積を有し、山、川、海など、様々な自然環境がある都市となったが、市民が十分に交流できていないと感じる。

中山間地域と都市部の市民が交流するきっかけづくりとして、中山間地域の公共施設の空きスペースを有効活用し、高齢者から子どもまでが地域の特色を学んだり、交流する拠点を整備してはどうか。



【浜松市への期待度グラフ】

●地の利を活かした観光交流を！

浜松は、日本の中心にあり、JR や高速道路など、日本の大動脈が多数通っている。全国的に見ても、国際色豊かで、観光資源が多い。

製造業が下火になる中、人を集め浜松の経済を活性化させるきっかけとして、観光面における浜松の強みを活かしてはどうか。具体的には、舘山寺温泉について、民間企業やボランティアを積極的に活用することで、明るく新しいイメージに刷新するような取り組みが必要と考える。

これと合わせ、ホテル、遊園地、動物園をはじめ、近隣の施設が、一層連携し、一体化する取り組みを進めることで、エリア全体の魅力を高める相乗効果を狙うべきである。

久保（くぼ）　真子（まさこ）さん

家庭教育の会ハートフル

[久保真子さん]
学区の小学校で、読み聞かせや図書貸し出しボランティアに携わり、地域活動にも熱心。なお、熱狂的な浜松市のマスコット「家康くん」の大ファン

●家庭教育の大切さを伝える

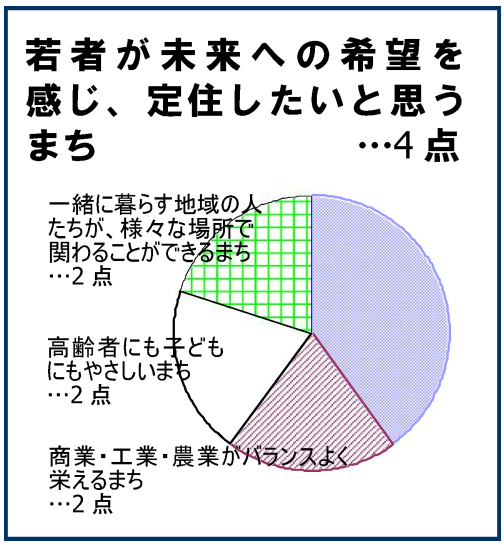
会員のボランティア活動を中心に、家庭教育推進運動を進めている『家庭教育の会ハートフル』は、健全な家庭教育の推進のため、子育て講演会や家庭教育フォーラムなど、様々な活動をおこなっている。

中でも、今年で 12 回目となる「心のこもった家族への手紙コンクール」では、家族への思いを文章にすることで、家庭の大切さを再認識してもらいたいと強く願っている。応募作品の手紙や絵画には、家族の温かさがこもった内容が多く、涙なしでは審査できないが、中には恵まれない家庭状況が伝わる作品もある。

このような活動を通じて、家庭教育の大切さについて市民の皆様の関心を深め、市民一人ひとりがそれぞれ家庭教育に注目してもらえるようになってほしい。

●まちなか大好き！だが・・・

浜松駅南側に在住しており、買い物などは駅前で済ませることが多い。まちなかが大好きでイベントなどがあるとよく足を運んでいる。しかし、現在は郊外に大型商業施設が多く建ち、その影響か昔に比べて活気が失われているように思う。私が子どもの頃は、「週末はまちいくで！」と言っては、西武百貨店や松菱の屋上で遊び、映画館にもよく行った。動物園と市が運営するプールが現在の市役所近くにあった時代だったので、まちなかには思い出がたくさん詰まっている。なんとか、中心市街地を活性化できればと思うのだが・・・。



【浜松市への期待度グラフ】

●子育て時代の大変な経験を活かして

私自身、子育て当時、仕事と育児の両立で悩んでいた。子どもが夏休みになると預ける場所を探すために奔走。放課後児童会は定員オーバーで入れず、近くの私立保育園も空きがなく、市から紹介された在宅での預かり保育も断られた記憶がある。最終的には無認可保育園へ。いろいろな経験をし、仕事と育児の両立の大変さは誰よりも理解していると思う。

現在は、以前よりも施設が多く、また、子育て情報サイトなどでの情報収集も容易になり、大変恵まれた環境で育児ができる時代になったと感じる。しかし、今もなお待機児童がいる中で、今後は、子育て支援施設を、だれもがいつでも利用できる環境づくりが大切だと考える。

黒柳（くろやなぎ）　千穂子（ちほこ）さん

北区女性団体連絡協議会（きたっこ）事務局長

大野（おおの）　登志江（としえ）さん

北区女性団体連絡協議会（きたっこ）運営委員

[黒柳千穂子さん（左）／大野登志江さん（右）]
きたっこの「ほおずき人形」がオランダ園芸博覧会（H24）に出展。25 年度は、引佐町の廃校を利用して作品展示等を行う。今、準備に忙しい。

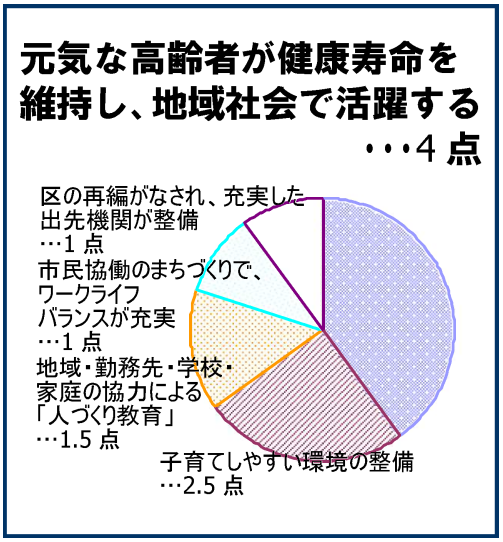
●「きたっこ」のまちづくり

会員数は 1,858 人。38 団体で構成している。北区の 4 地域をまとめ、女性の視点から生活の中の課題を解決、また、女性自らが活躍できることに取り組んでいる。ほおずき市などの地域イベントやコミュニティの活動を通して、暮らしやすいまちづくりに貢献している。東日本大震災などの大規模な災害時には、女性にしか対応できないことも数多くあったと聞く。女性の力はコミュニティの中でも大きいはずである。

北区は 4 つの市町が合わさった行政区であり、それぞれの地域の考えをまとめる難しさを強く感じた。その時に必要だったのが話し合いをする「場」。30 年後の将来を考えると、高齢化が進み、まちづくりで活躍するのは高齢者であると考えている。将来においても活動の拠点が必要で、無料の市民協働スペースは極めて重要である。市民協働を推進する上でも、活動しやすい環境づくりを更に進めてほしい。人と人がつながり合って、支え合う世の中になっていけばと感じる。実現は市民活動のヤル気につながる。

●みんなの浜松！の意識を広めたい

総合計画では、市民協働のまちづくりを進める上で、社会関係資本を大切にしている。これは、とても良い考え。効率的な行政運営を進めるために制度の統一などは必要であるが、市民を置き去りにしている感覚を受ける。浜松の市域は広く、北区はその特徴を凝縮した地域。地域の良いところは更に伸ばしていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

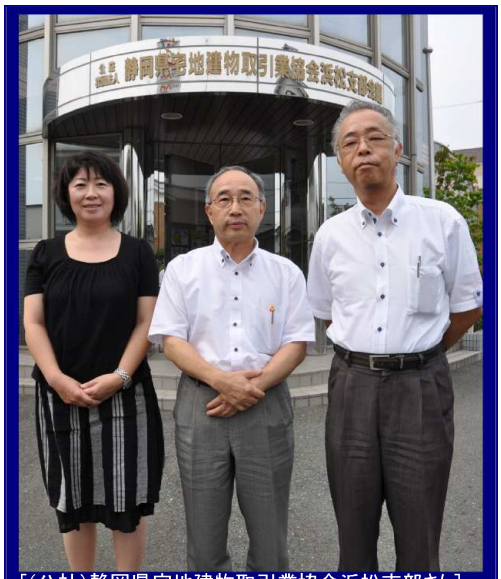
北区にも大切な文化財が数多く残っている。三ヶ日町宇志には「雨乞いの面」や平安前期の史跡「瓦塔」という歴史的資産が。また、「浜名記」といった江戸後期の書物が個人宅で保管されている。現在の方法では、こうした貴重な文化財が消えてなくなることが心配。次世代に引き継ぐために保管のあり方などを考える必要がある。

また、個人と地域、行政の結びつきを更に強めていくことが必要。「広報はままつ」は個と行政を結ぶ太い絆であったが、簡素化されたのはマイナスである。地域密着の取り組みが大切で、区役所においては「コミュニティ担当職員」が極めて重要な役割を担う。今後、個と地域、行政を結ぶ要として活躍することを期待したい。

（公社）静岡県
宅地建物取引業協会浜松支部さん

支 部 長：木俣純一さん

副支部長：髙橋美代子さん　副支部長：澤木光吉さん



[(公社)静岡県宅地建物取引業協会浜松支部さん]
我々の業界は、土地取引を通じて地域経済の変化を肌で感じることができる。

●時代にあった中心市街地活性化を！

松菱の破綻や大丸の進出断念を見ても、百貨店が人を集め、中心市街地で買い物をするというビジネスモデルは既に終わっている。市では様々な補助事業などを行って対策を取っているが、あくまで対症療法に過ぎず、衰退の流れは止められない。大手ディベロッパーに開発を任せても、地域の実態に合わないミニ東京のような提案が出るだけではないか。

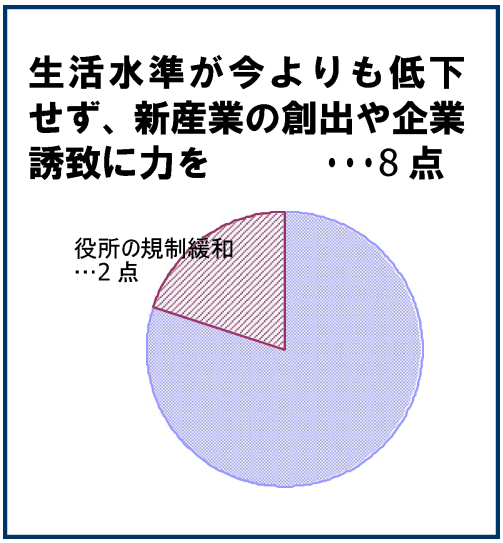
むしろ、近年駅前のマンションが人気化する中、発想を転換し、居住機能を高めた災害に強いまちづくりを進めてはどうか。具体的には、空き地を活用して都市中心部に憩いの場を提供し、災害時には活動拠点とする。また、マンションの低階層部分をスーパーや病院とし、ファミリー世帯から高齢者世帯まで、歩いてアクセスできる生活圏とすることも考えられる。

●地域にあった土地政策を！

東日本大震災は、浜松の土地利用にも非常に大きな影響を与えている。特に、津波被害が想定される地域では、土地の買い手がつかず、工場も移転の意向が強い。しかしながら、三方原台地など開発ニーズの高い地域は、省庁の縦割りからなるいくつもの規制により、移転できず不満も根強い。安全、安心な市民生活の実現や、地域産業の発展や雇用を確保するためにも、実態に合った土地利用規制になるよう市政には頑張ってほしい。

●市民ファンドによる新産業の創出を！

浜松は製造業が中心となり経済を支え、温暖な気候や充実した医療機関などにより、住みやすいまちである。また、リーマンショックなどの経験を見ると、製造業の好不況に地域経済全体が左右されやすい。30 年先は、製造業だけでなく多様な産業が地域経済を支えているような仕組みをつくることが大事だが、それは行政が育成するのではなく、市民みんなが応援するような工夫が大切である。例えば、地域の大学が持つ先端技術を応用し、新たな産業の芽を育てるとともに、ベンチャー企業の資金を供給する市民ファンドがつくられ、配当などが還元されるような仕組みをつくれないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●中山間地域に配慮したまちづくりを！

中山間地域では、これまで地域に住みコミュニティの核となっていた役場の職員が配転を機に転出せざるを得ず、地域は一気に衰退していると耳にする。

人口減少時代において、コンパクトシティを進めることが必要だと聞くが、都市部もあり中山間地域もある浜松の現状にあった形で考えるべきではないか。

児玉（こだま）　惇（あつし）さん

浜松読書文化協力会　会長

[児玉惇さん]
教育は、人間関係で成り立っている。

●市立図書館の活性化を！

民間活力を導入するため、図書館への指定管理者制度を進めている。市民にとってまず必要なことは、選書やレファレンスなど、職員の専門的資質、能力を充実させ、利用しやすい図書館を目指していくことであると考える。

電子書籍や資料のデータベース化等、ICT 化などの環境の変化に乗り遅れないよう積極的に取り組んでいく姿勢が大事である。また、現在進めている、小中学校の図書館との連携を、高校や大学まで広げていく発想が必要である。

さらに、浜松市の図書館は、県内で唯一、一般向け図書会の文庫本を保有しており、これを広く活用してはどうか。

●コミュニケーションを充実させる教育を！

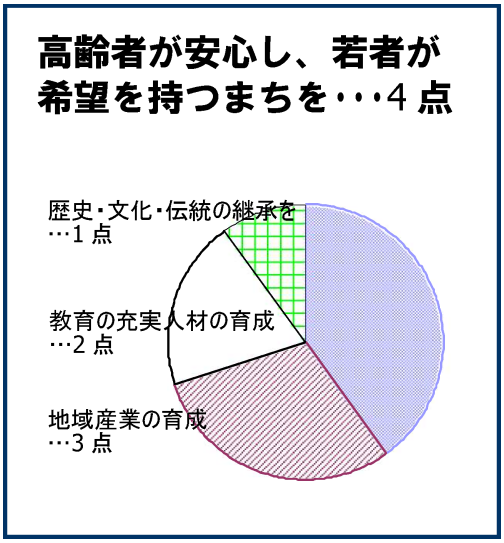
子どもたちを見ていて、近年、人間関係の構築が下手になってきたと感じる。

コミュニケーションの基礎は、言葉にある。覚え、考え、聞き、表現することは、どれだけ言葉を知っていて、使いこなせるかに左右される。

学校教育でも、「ことばの教育」が土台である。読書もさることながら、小学校から相互に議論する時間を設けてはどうか。

●人が自然に集まる中心市街地を！

浜松市中心部は、現在、活気に乏しく、行政の様々な取り組みにも関わらず、衰退を食い止められているとは言えない。交通網を整備しても、市民にとって行きたい、行きやすい場所でなければ、人は集まらない。中心部には衣食住に係るものが集積しているのだから、例えば、医療福祉施設を立地させ、自ずと人が集まる仕組みをつくってはどうか。発想の転換が必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

●地域の隠れた魅力発見を！

浜松は、気候が温暖にして豊かな自然や、特徴ある歴史文化がたくさんある。

しかし、特産物に関しても、みかんなどの一部のものを除き、高付加価値・ブランド化されているものがない。

ホオヅキやガーベラなど、既に全国的なシェアが多いことから、これらをブランド化し、収益の拡大に結びつけるとともに、観光への活用など、様々な方向に展開してはどうか。

浜松には隠れた魅力がまだ残されている。

小林（こばやし）　芽里（めり）さん

浜松 NPO ネットワークセンター　事務局長

［小林芽里さん］
NPO の隣接分野が互いに協力し合える環境を作るために、現在活動している。

●住みやすいまち、浜松

浜松市に住んで 11 年目になる。海から 2000m級の山まで、多様な自然環境がある。世界的な産業や新幹線の駅がありながら、農村風景とも共存し、バランスのとれた住みやすいまちだと思う。市民の気質も親しみやすく、市外との交流も盛んである。

私は東京で生まれ育ったが、東京にあって浜松に足りないものは思い浮かばない。職住接近で、職場も近く、正直なところ浜松市がこれ以上大きくなってほしいとは思わない。今の浜松市に満足している。

●新しいコミュニティづくり

高齢者や単身者が増える社会に向け、家族でなくてもお互いに支え合えるコミュニティの再構築が必要だと思う。かつての農村共同体を理想とする人もいるが、そういう旧来のしがらみや男女差別が嫌で都市に出てきた人もいる。今のコミュニティの良いところを活かしつつ、障害のある人や外国人などのマイノリティも含めて、多様な人たちが共生するソーシャル・インクルージョンを地域から実践してほしい。NPO でも市民の自発的な活動を進めていきたい。

●耕作放棄地の有効活用

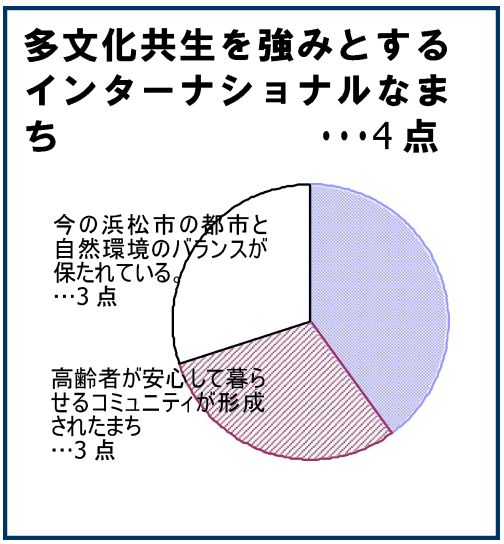
人口減少に伴う中山間地域の衰退や里山の耕作放棄地など、農業や農村景観が衰退していることが気になっている。耕作放棄地を都市部の人が活用できるしくみや、ボランティア等が耕作放棄地を活用し、里山の自然を維持するしくみが必要だ。個人の土地を柔軟に活用できるしくみがほしいし、地域内の自給自足・循環型社会も進めていきたい。私は中区の里山の保全に関わっているが、活動している人は高齢者が多い。高齢者だけでなく、若い人にも参加してほしい。NPO の活動としても、楽しく市民参加ができるように仕掛けていきたいと思っている。

●文化の多様性を強みに！

浜松市は約 80 か国の外国人が住むインターナショナルな街なので、多文化共生を強みにしていくよう総合計画にも盛り込んで欲しい。人口減少による労働力の不足は、外国からの労働者に頼らざるを得ないし、また外国人の配偶者やそれに伴う子どもの呼び寄せも増えている。

日本は外国人の増加にネガティブな面を心配する人も多いが、彼らの持っている多様な文化はすごくユニークでパワーがある。ますますグローバル化する時代に、彼らの多文化な力をポジティブにとらえて活用すれば、浜松市も元気になるのではないか。

日本で生まれ育つ外国人も増えていて、彼らも子育て世代になりつつある。NPO では浜松育ちの移住第二世代の外国人が、地域で活躍できるように活動している。文化の多様性を浜松の強みにしていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

塩﨑（しおざき）　明子（あきこ）さん

株式会社颯爽取締役、ママジョブネット事務局、
ひまわり 2525 プロジェクト代表

[塩﨑明子さん]
就職・起業支援、子育てママの支援マガジン編集、遠州お仕事図鑑の制作などを手掛ける。ひまわり開花祭を西区・浜北区で開催。相模原市出身。

●アイデアで世の中を元気に！

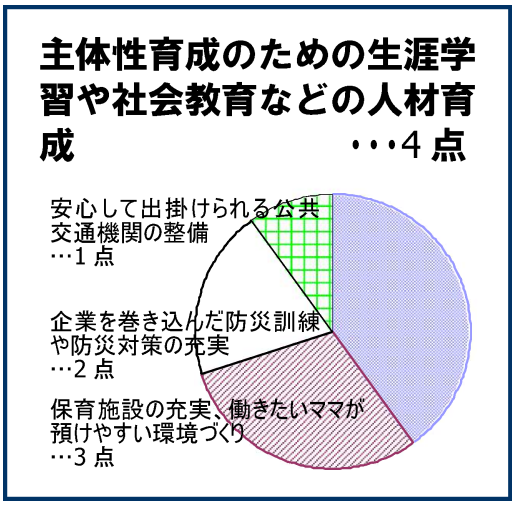
浜松は地元の方ならもちろん、よそ者でも、行動しやすい環境が整っているまち。住民の可能性を信じ、主体性を引き出す仕組みをつくれば様々なアイデアが出て、まちはもっと面白くなる。特に若者ならではの発想力を地域の大人たちが引き出し、地域活性につなげる仕組みとして、長期実践型のインターンシップの導入や起業家精神の育成、起業サポート、就労意欲や仕事を主体的に創造する意識を育てる早期のキャリア教育の充実を図る必要性を感じる。

●未来を描けない世帯のためにできること

共働きでなければ家が買えない、ぜいたくができない、子どもを増やせない、未来も描けない。働きたくても、子どもが保育園に入れない、学童保育の定員が少ないなどで、フルタイムで働けない問題も生じている。具体的な対策として、働くママたちのサポートとして、夏冬の長期休みや土日・祝日の保育、病児の保育・学童保育の充実は必要不可欠。能力や意欲の高いママたちが埋もれてフラストレーションを抱えている現実をどうにかして、女性たちがもっと学び、活躍できる環境づくりが必要。また、少子化対策として 3 人以上産み育てると多くのメリットがあるような制度があれば、子どもが多くいる世帯も増えるのではないだろうか。

●女性の活躍を引き出したい

浜松には製造業を中心とした工業が多く、女性のサービス業やオフィスワークの仕事は少ない印象がある。浜松で魅力的な仕事を増やし、子育てしやすくなれば、首都圏などからも優秀な人材を確保することができる。女性の活躍を引き出して、地域の活性化につなげていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●人材育成と世代を超えた対話を

あらゆる面で人材育成が必要。働く人・子育て世代・学生の意識や就労・健康への意識を高めなくてはならない。キャリアを充実させ、だれもが学びたいときに学べる社会教育体制の整備が必要となる。また、浜松には外国人が多いのに住民との交流が少ないのがもったいない。グローバル社会に向けて、国際交流・教育の充実を図るべきだと思う。以前に勉強会として、チームで議論を深める「100 人ワールドカフェ」を企画した。対話により、良いアイデアが出たのでこうした勉強会を多く開催していきたい。

重井（しげい）　アマンダさん

特定非営利活動法人 浜松 NPO ネットワークセンター勤務

［重井アマンダさん］
言葉や文化の違いを越え、お互いが尊敬し、尊重し合う“真の多文化共生”の実現を目指して活動に取り組む。

●「単一化」より「多様化」を！

「多様化」により発展!!

雇用に関し、「外国人は怠け者」というイメージを抱いている企業が多いように感じる。日本人と同様に外国人も人それぞれであり、その人を見て正当に評価し、採用等の判断をしてほしい。

また、工場などに勤務する外国人労働者は、以前からの単なる労働力という扱いが現在でも変わっておらず、会社と話し合いの場を持ったりして意見や提案を伝える機会は与えられていない。日本人では思い付かないような新たな発想が生まれる可能性もあるので、ぜひ話し合える場をつくってもらいたい。

日本人だけではなく、外国人の考え方も活用して多様性を持つことは、企業の発展、引いては少子高齢化による労働力不足にも貢献できるはずである。

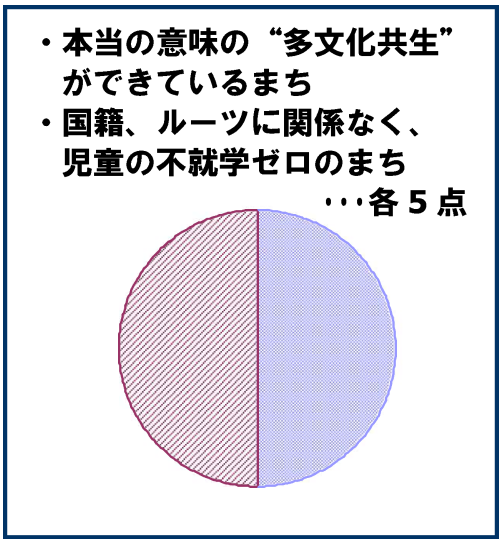
●“日本語教育”！！

行政は、とにかく徹底的に「日本語教育」を!!

会社で意見や提案を行うためにも、日常会話ではなく、ビジネスでも通用する日本語の習得が必要となる。また、高度な日本語の習得は、様々な業種への就職の道を開くことになる。

行政では、「多国籍の住民に対しては多言語表記」という対応を取りがちであるが、国籍が増えていけば対応に限界がある。このような課題を解決するためにも、外国人への日本語教育は重要と考える。

●外国にルーツを持つ子どもたちに支援を…



【浜松市への期待度グラフ】

外国にルーツを持つ子どもたちには支援が必要!!

外国にルーツも持つ子どもたちは、学校で社会性や日本の文化などを身に着ける。しかし、そこで学んだ日本の文化は、自分たちの家庭で受け入れてもらえずに孤立して精神的に不安を抱えるケースが多い。

各学校に専門家を派遣するのではなく、教師がカウンセラーとなって子どもたちと接することが理想であり、大学等の教職課程に導入することが望まれる。

また、外国にルーツを持つ家庭は、金銭的に余裕がなく、子どもたちが進学をあきらめなければならないことも多い。子どもたちが様々な選択肢を持つためにも、奨学金などの金銭的な支援を望む。

静岡文化芸術大学のみなさん（1 頁目）

静岡文化芸術大学デザイン学部

磯村克郎研究室 産学協同ワークショップ参加者

川村　早紀さん（浜松市出身）
近藤　結衣さん（焼津市出身）
菅内　祐未子さん（岐阜県出身）
関　穂菜美さん（茨城県出身）
中島　渉さん（石川県出身）
平岩　美波さん（愛知県出身）
藤澤　友希さん（長野県出身）
山本　瑞季さん（愛知県出身）
渡邉　弘平さん（愛知県出身）

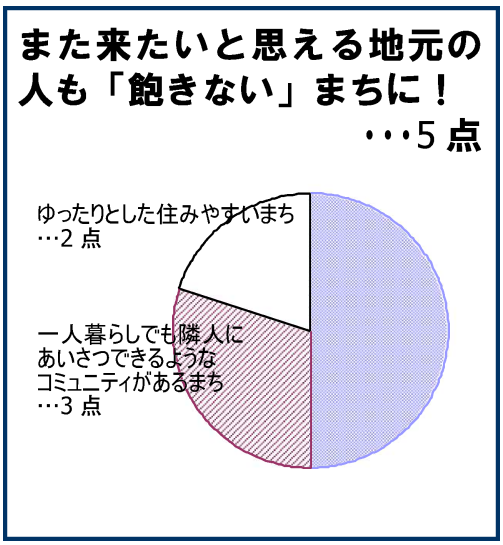
[静岡文化芸術大学デザイン学部のみなさん]
磯村研究室の産学協同ワークショップに参加する。県外の出身者が多く、市内在住者とは異なる視点の意見が飛び出た。

●浜松市のイメージは・・・

○浜松市はものづくりのまちのイメージがある。ただし、楽器やバイクなどの産業などから具体的に何かを実感したというより、周りから言われてそのイメージを持つようになった。
○うなぎだけでなく、みかん、大根、しらす、ガーベラ、セルリー、うなぎいもなどの特産品がある。企画立案の授業で浜松の特産品を調べることがあり、特産品が多いことを知った。

●学生から見た「浜松まつり」

○浜松まつりに魅力を感じているが、まつりに参加できない人が苦情を言っているということも知っている。参加する人としない人との温度差はある。
○野口町では、町内に住む学生が浜松まつりに参加できる仕組みがあり、参加したときは楽しかった。ただ、参加できなければうるさく感じるかもしれない。
○浜松まつりのように、イベントがあると人が一気に集まるが、終わると一気に誰もいなくなることが浜松の特徴でもある。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松を訪れる人の動きを考えて

○浜松を訪れる人の移動を考えると電車の方が便利。その前提で考えると、現状は、電車が 1 本南北に走っているだけで、行く場所が限定されてしまうことが残念だ。また、浜松市内では、ある観光地から別の観光地への移動が大変で、1 日に何箇所もまわることができない。
○泊まりの観光に弱い。「さわやか」で食べて中田島砂丘に行くというのが学生の浜松旅行の定番コースだが、泊まりで浜松を過してもらうには 2、3 箇所の観光スポットが必要である。浜松で 2 日目も楽しめるまちづくりをしてほしい。

静岡文化芸術大学のみなさん（2 頁目）

●浜松のまち並み

～「浜松にしかないものに」～

○家族が浜松に来たときに、暖色系の道路整備、天気が良い日が多いこと、人がせかせか歩いていないというイメージを持ち、まちの雰囲気がやわらかく、のんびりしているという感想があった。

○アクト通りがきれいであるが故に、その他の場所が気になってしまう。まちなかはきれいなイメージはない。

○花の植栽が整備されている場所がある。そういう場所がもっと増えたら良い。

○浜松のイメージは、少し考えれば出てくるが、これというものがない。いろいろあることが、何もないことにつながる。「浜松」から連想されるものが一つであった方がよい。例えば、遠鉄百貨店が都会的な建築様相に変わったが、このまち並みと浜松の伝統文化が融合したら、「浜松にしかないもの」ができるのではないか。

●デザインを重視したまちづくり

○まち並み、工業製品や広告などを見て感じるが、浜松にはデザインとしての情報量が少ないと感じる。

○若者をターゲットにするなどのコンセプトが明確で、同じ業種の店が１箇所に集約しているようなまちになってほしい。さらに、デザインによってコンセプトが伝わるまち並みになってほしい。

●「垣根」を越えたコミュニケーションを

○NPO 法人などのまちづくりに関する活動が非常に多い印象がある。こうした団体の活動を通じて、地元愛の強さを感じる。自分の地元では、大学生は近くの大都市に通うこともあり、大学生と大人が一緒になってまちづくりを行う印象はない。

○介護ホームでのバイトで高齢者と関わる経験をしたことで、若者同士、高齢者同士など、似たもの同士の中でしかコミュニケーションがとれていないと気付いた。それは、外国人同士、障がい者同士でも同じだと思う。高齢者が若者とコミュニケーションを取れれば、きっと喜ぶはずであるし、それぞれの「垣根」を越えられるような仕組みをつくってほしい。

○現在、アパートの隣の人にもあいさつをしづらい状況がある。高齢者の一人暮らしが増えることが想定される 30 年後を考えたとき、アパートの隣人にあいさつできるような雰囲気があれば、一人でも暮らしやすくなる。

○浜松では、駅前のプロムナードコンサートなどのイベントが多く、学校が地域と関わりを持とうとしているのが分かる。ただし、情報が一般市民にはあまり知られていないことも多く、告知をもっとしてほしい。いろんな人に知ってもらえれば、交流につながる。

静岡文化芸術大学のみなさん（1 頁目）

静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科
舩戸（ふなと）　修一（しゅういち）研究室
丸山（まるやま）　友葉（ともは）さん（愛知県蒲郡市出身）
中原（なかはら）　僚介（りょうすけ）さん（川根本町出身）
平野（ひらの）　実穂（みほ）さん（浜松市出身）
立花（たちばな）　宝百合（たまゆり）さん（長野県木曽郡大滝村出身）

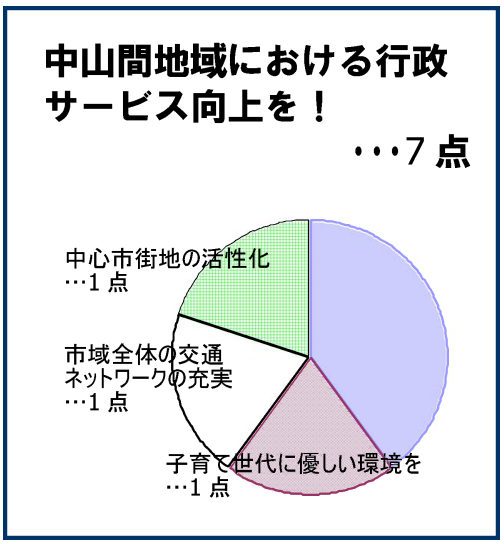
[静岡文化芸術大学舩戸ゼミのみなさん]
中山間地域の実態調査を春野町で実施中。地域のお祭りにも招待されるなど、すでに地域に溶け込んでいる様子。

●工業が有名。実は農業も強い

○浜松は工業が盛んで日本一の生産量や品質を誇るものがたくさんある印象。特に自動車・バイクやピアノのイメージが強い。
○「ものづくりのまち」というだけあって三方原の馬鈴薯や春野のお茶などの「農業」も盛んだ。
○ただ、農業が盛んということは大学で勉強して分かったこと。工業に比べ、農業に対する知名度は低い。

●「遠州とらふぐ」を知っているのは約 130 人中 3 人！？

○特産品と言えばやはり「うなぎ」「みかん」「浜松餃子」。
○しかし、うなぎは漁獲量が減っており、高値で庶民的ではない。手の届きやすい特産品開発を進めた方がよいのでは。
○市外の人をもてなす意味では、高級な特産品が喜ばれる。価値あるものと、大衆的なものと両方あった方が良い。
○企画立案という授業で「遠州とらふぐ」について研究している。舘山寺の観光協会が遠州とらふぐを広めようと活動しており、首都圏や中京圏の富裕層に PR をしているが、文芸大の学生を対象に遠州とらふぐの認知度調査を実施したところ、約 130 人に聞いて知っていたのは 3 人だった。高級路線であるため学生には手が届きにくいということはあるが、例えばインターネット等で調べようとしても関連サイトがほとんどないなど、まだ PR が十分ではない。



【浜松市への期待度グラフ】

●大学の法被で浜松まつりに参加したい

○浜松まつりの盛り上がりはすごい。
○まつりのインパクトが強いため、明るく楽しい人柄が浜松市民のイメージ。
○地域ごとの団結力や盛り上がりがすごく、初めて参加する場合、最初は躊躇するが、参加すると、その一体感は楽しい。
○伝統あるお祭りのため難しいとは思うが、大学のロゴ入りの法被をつくって、大学のサークルとして参加したいという学生もいる。

静岡文化芸術大学のみなさん（2 頁目）

●中心市街地の活性化を

○若者にまちなかで買い物をしてもらうにはやはり百貨店やデパートが必要だ。商店街が充実すれば、上の年代の方も足を運ぶようになるのでは。
○まちなかにセレクトショップなどもあるが、学生にとっては敷居が高く、入りにくい印象がある。
○遊ぶとなると、服飾店だけではなく映画館などもそろう郊外のショッピングモールに行く学生が多い。
○一方で、郊外だとやはり高校生や車を持っていない学生にとっては遠い。
○まちなかは人の歩くスピードが早い。「過ごす」場所というよりも、仕事をしている人が「通る」場所であり、駅は「ツール」だ。
○ベンチなど、一休みできる場所があればよいと思う。

●ゼミの活動から（春野町における実態調査）

○春野町において、中山間地域の集落の実態調査を行っている。調査の中で、合併前に比べて地元の意見がなかなか本庁に届かないという話を聞いた。
○合併によって市域が広がり、地元を知らない市の職員が配置されるようになったため、行政と地域の距離がますます遠くなっているような印象を受ける。
○限界集落の現実の厳しさを聞くにつけ、「私たち若い世代に何かできることはないか」と考えてしまう。
○学校の統廃合の話や、その対応としてスクールバスの手配もあるが、バス手配の基準をぎりぎり満たさない児童もいるなど、苦労している実態を聞く。
○浜松市は市域が広いため、市内都市部と中山間地域の交流を進められると良い。その方法として民泊がある。今の浜松には民泊をマネジメントできる組織がないが、今後、その取り組みを支援できる NPO や市民活動組織などが立ち上がっていけば市内において「都市・農村交流」が実現できるはずだ。

●30 年後のまちづくりのモデルである「中山間地域」

○まちづくりに取り組むに当たっては、高齢者と子どもを基準とすることが重要だ。
○高齢化を考えると医療や介護が重要な課題となる。とりわけ中山間地域は深刻な課題だ。
○今後は超高齢社会を迎えるというが、中山間地域はすでに高齢化が進んでいる。しかし、春野町の自治会には 90 歳の会計係がいるなど、高齢者が現役として元気に活躍している。
○社会参加をしていることが高齢者の生きがいになっている。
○中山間地域は地域全体で支え合っているため、高齢者は孤立しておらず、地域の中で何かしら社会的な役割を担っている。市全体の今後を考えても、このように高齢者に役割を与える施策が必要である。
○今後のまちづくりは行政依存ではなく、市民のマンパワーを引き出したうえで行われるべきである。行政は市民がまちづくりに参加しやすくなるような仕掛けや工夫を施す必要がある。

清水（しみず）　良和（よしかず）さん

浜松市環境学習指導員・地球温暖化防止活動推進員／
環境省エコアクション 21 審査人／塩町自治会 会長

[清水良和さん]
環境マネジメントシステムの指導・内部監査で活躍。エコアクション 21 の企業審査を年間 40 件ほど手掛ける。

●やらまいか精神とまつりで培う絆

やらまいか精神は浜松のすばらしい文化だと思っている。京都に代表されるような世襲文化ではなく、来るものを拒まず、すべてを受け入れて取り組む気質が浜松にはある。

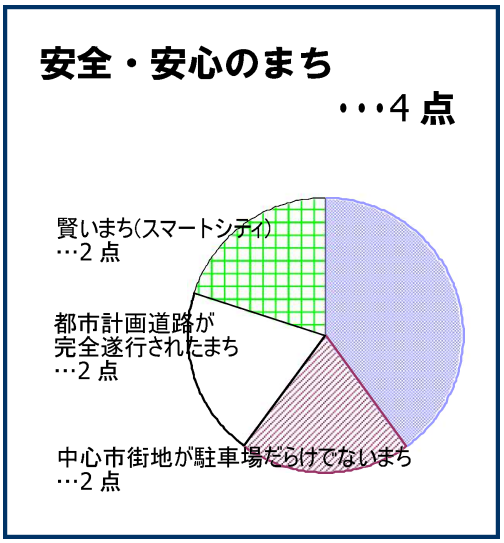
自治会として、浜松まつりは重要な催し。屋台でのおはやし、練りの勇ましさや凧揚げなどがあり、浜松まつりでやらまいか精神と団結力が高まる気がする。その後の自治会の活動にも、まつりで培った絆が活かせている。

●安心・安全を交通政策のキーワードに

安全・安心をキーワードとした交通政策を望みたい。歩道橋や地下道は人よりも車優先の発想ではないか。地下に車を通すなど、足の不自由な高齢者が安心して渡れる横断歩道の確保が必要だと思う。交通手段として、バス路線の拡充や増便も必要だと考える。例えば、循環バスくるるの逆周りのルート化、家康公に関連したルートや停留所を取り入れてはどうだろうか。

●環境配慮型の都市に向けて乗り遅れてはいないか

気象庁発表の日照時間で浜松はナンバーワン（2011 年）。これに基づく新エネルギー政策に期待している。例えば、まち全体の電力の有効利用を図り、省資源化を徹底した環境配慮型の都市として、国が推進するスマートシティ構想がある。しかしながら、浜松はワンテンポ乗り遅れているように感じている。ソーラー発電やエコ推進などの個々の政策について、出来ているだけにコラボレーションに欠けているように見える。国の政策をうまく利用して、地球温暖化の防止対策をすべての市民が取り組むことこそ、重要ではないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●表彰や補助制度で取り組みの推進を

浜松市では「新エネ・省エネ対策トップランナー認定制度」を始めて、事業所・企業に申請を呼びかけている。中小企業では省エネがやっとであり、新エネまで手が回らないのが現状。そのため、エコアクション 21 等を取得した中小企業をそれだけで特別表彰する制度を策定してほしい。さらに、事業所・企業が環境マネジメントシステムの認証を受けた場合、市から認証登録の費用 1 回分の補助をして、認証のためのインセンティブを付与してはどうだろうか。事業所・企業の特別表彰や補助制度により、環境への取り組みは一層進むと思う。

杉浦（すぎうら）　悦郎（えつろう）さん

株式会社　杉浦建築店

［杉浦悦郎さん］
高齢者の単独世帯を減らすため、2･3 世代同居等の優遇措置があればと語る。

●歴史や文化の風格あるまちを！

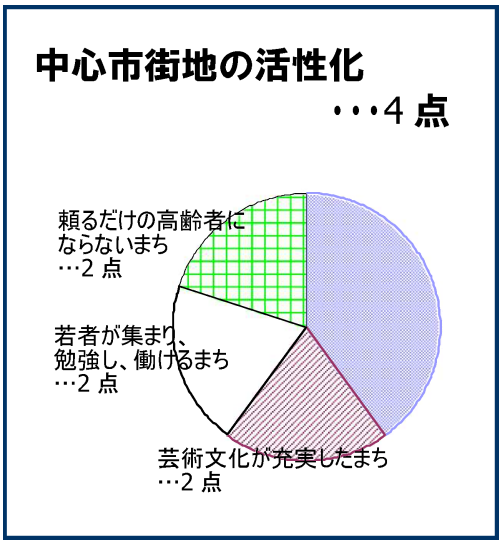
浜松城は、徳川家康建立の出世城として歴史的に重要な意味を持つ。行政は、これを新たな観光の柱に据えようとしているが、現在の浜松城は RC 造、歴史的価値に見合った風格があるとは言えない。多くの歴史ファンが訪れる場所であり、来訪者に十分に満足してもらうためにも、姫路城や金沢城のように歴史的建造物に相応しい造りとし、常に手を入れ、歴史の風格あるまちづくりを進めてほしい。また、美術館や博物館などの文化芸術施設はいずれも古く小規模であることから、市民にとって魅力を感じない。こうした施設は一定の地域に集約し、連携を図ることで相互の魅力を高め合うような施策を進めてはどうか。

●ものづくりを教えるまちを！

自社では現在、寺社の建築なども手掛けているが、伝統的な大工の特殊技能や経験を若者に伝承するため、ベテランから若手まで、できるだけ年令の偏りを無くし、現場で一緒になって仕事をする環境をつくっている。将来の日本や浜松の産業を考えると、工場の大量生産ではなく、職人の技術を活かすことが大事である。浜松は東海道の中心に位置し、気候も良いことから、集積したものづくりの技術や経験を教える学校をつくり、全国から専門的技術を持つ職人とこれを学びたい若者を集め、浜松で学び働く人たちを増やすまちづくりを進めてはどうか。

●浜松らしさを活かした教育を！

私は、幼いころから家業を見て育ち、働くことの具体的なイメージを見て育ったが、現在の学校教育では職業観を養うような機会が多いとは言えない。浜松は農林水産業、製造業、サービス業など様々な仕事があり、バラエティに富んだ産業構造となっている。また、光技術をはじめ､様々な分野で独自のポジションを築いている企業も多い｡こうした浜松の特徴を活かし、商工会議所と連携して、小学校高学年から中学生を対象とした職業体験を大幅に増やし、子どもたちの就業意欲の向上や地域産業の理解･促進を進めてはどうか。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松の魅力が集まる中心市街地を！

まちなかで育った自分にとって、ここ数十年で中心市街地の活気が急落したことは寂しく感じる。小さい頃は、様々な人や物が集り、子どもにとって魅力的な場所であった。金沢の近江町市場では、市民と観光客が集まり活気を生み出している。浜松にも他に誇る美味しい農産物や海産物、人を集める魅力的なものが数多くある。地域通貨などの仕掛けも検討しながら、中心市街地を盛り上げていく必要がある。

杉浦（すぎうら）　政紀（まさのり）さん

株式会社杉浦組代表取締役社長

静岡県公立高等学校 PTA 連絡協議会

●浜松の個性を活かしたまちづくりを

浜松のものづくりは、その時代のニーズをつかみ、流れに乗って発展の歴史を築いてきた。工業に比べ商業が弱いと言われるが、地元に根付いた商業が発展するわけではなく、大手商業施設に頼るところが大きいことが一因としてある。また、農業も特産品が多いはずだが、活かしきれていない。浜松の個性を強く出した物販や飲食など、もっと地元のものを活かす取り組みで、農商工ともにバランスよく発展してほしい。

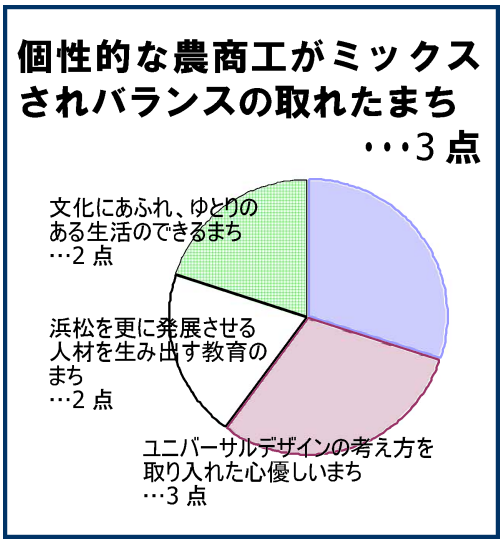
●市の玄関口の緑化整備を

駅周辺の市街地の活性化に関しては、交通手段の整備と市民の意識改革が必要だ。浜松は地方特有の車社会であるが、市民も便利さに慣れすぎて車に頼る意識が強く、それが交通網の発展を阻害しているのではないか。

また、市域が広く、海、山、両方の自然が豊かな特徴があるが、都市緑化が少ない。市の中心部の公園が少なく、植樹帯等の整備ができていない。自然が豊かな政令市として、市の玄関口である駅周辺の緑化整備も必要。ただし、まちの活性化は、外部からの観光集客を目指すのではなく、まずは、市民が使いやすく、喜ぶまちづくりであってほしい。それが結果、観光客を受け入れられるまちにつながる。

●未来のための「コンクリート」と「ハード・ソフト・ハート」

公共施設など、これからの都市基盤整備については、今後も続く厳しい社会経済情勢や限られた財源を見据え、長期計画のもと進めていくべきだ。その際、災害に強い安心安全なまちづくりであることはもちろん、ユニバーサルデザインなど、総合的な視点が必要であり、イニシャルコストとランニングコストを比較し、長期で考えるとどちらが合理的なのかを見極めていく必要がある。



【浜松市への期待度グラフ】

「コンクリートから人へ」と一時よく言われたが、ライフサイクルを重視し、未来のために必要な施設、設備を整備する。そしてメンテナンスにより、長く有効に使う。そうすれば、コンクリートは未来のためになる。

ユニバーサルデザインの観点でいけば、ハード整備だけでなく、市民一人ひとりのハートに訴え、ソフトの整ったまちを目指してほしい。浜松市は政令市だが、いわゆる大都市の人と人との結びつきがないまちを目指すのではなく、田舎の温かみ、人付き合いを残したまちであってほしい。すべての人が住みやすいまちであり、市民一人ひとりがその意識を強く持っていたい。

杉田（すぎた）　智樹（ともき）さん

静岡県弁護士会

[杉田智樹さん]
高齢化にともなって、詐欺事件が増えている。ぜひ、気をつけてほしいと語る。

●次代を担う活気ある浜松の経済を！

次代を担う新たな産業の育成は、日本の課題。浜松も、製造業に続く新産業を誘致し、新たな雇用を生み出す必要がある。

また、平日の昼間、中心市街地を歩いている人が少ないと感じる。人口規模の問題もあるが、他の政令市と比べても、集客力が弱く、にぎわいに欠ける。松菱跡地の今の状況に、市民は皆満足していない。市街地の快適な環境をつくり、活性化を図ってはどうか。

●地域の核を結んで移動を活発化！

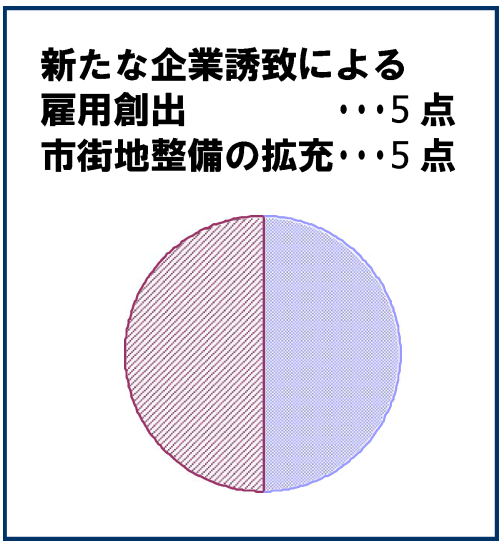
浜松は車社会だが、車の量に対し車線が少ない。バス路線では、渋滞を引き起こしている。また、郊外へ行くと街灯が少なく、夜間走行する際、暗く怖く感じる。まだまだ、道路の整備が十分でない。

中心市街地のほか、浜北副都心など、各地域の核を結んで、移動を活発化させるためにも、交通網の充実を検討してほしい。

●法曹分野との連携による公益の実現！

以前、浜松市建築紛争調停委員会の委員長を務めたことがあった。救済制度については、建築に関する事項だけでなく、必要に応じて充実させても良いと感じた。

現在も、市の外部監査に携わっており、貴重な体験をさせてもらっている。今後も、行政との適切な緊張を保ちつつ、公益の実現に向け、政策づくりなど、弁護士としての視点から意見を述べるとともに、行政対象暴力への対応など、十分連携していきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

市政において、暴力団対策や税金の収納対策など、十分取り組んでいるが、外国人の人権や健康保険の問題にも力を入れてほしい。

また、今後は、高齢者が増えていくことで、成年後見や消費者問題への対応が、大きなポイントとなると思われる。

法曹界としても、弁護士など、法に携わる人数を適正化し、質の高いサービスを提供するとともに、行政とも必要な連携を十分とりながら、安全・安心な市民生活の実現に向けて、努力していきたいと考えている。

杉山（すぎやま）　公一（こういち）さん

株式会社遠鉄ストア開発部部長

［杉山公一さん］
価格競争ではなく、地産地消など食の安全・安心、店舗におけるお客様との会話などに積極的に取り組む。

●地域とともに歩む…

地域とともに歩む総合生活産業として社会に貢献する。

これは遠鉄グループの経営理念である。

スーパー業界では、浜松は交通の便が良く、比較的賑わっている地域のため、県外業者が参入しやすいと考えている。しかし、その反面、うまくいかなければ撤退の可能性も高い。このため、地元資本である当社が地域の生活を守っていかなければならない。

当社は商圏を半径 1km と考え、店舗を展開している。これは、交通弱者である高齢者の方たちが何とか歩ける距離。また、高齢化への対応として、野菜や惣菜などをできるだけ少量で買いやすくしたり、市内 3 店舗で「無料お買い物バス」を運行したりしている。可能な限り、店舗にお越しいただき、従業員との会話を楽しんでいただきたい。

また、当社でもネットスーパーを実施している。当初は、車が運転できない高齢者の需要を想定していたが、現状では、まちなかのマンション世帯や福祉施設など法人の需要も多い。仕事等でネットに慣れているこれからの高齢者世代の需要は見込めるが、ネットに不慣れな今の高齢者世代には店舗で従業員と会話をしながら直接買い物をすることが好まれるようである。

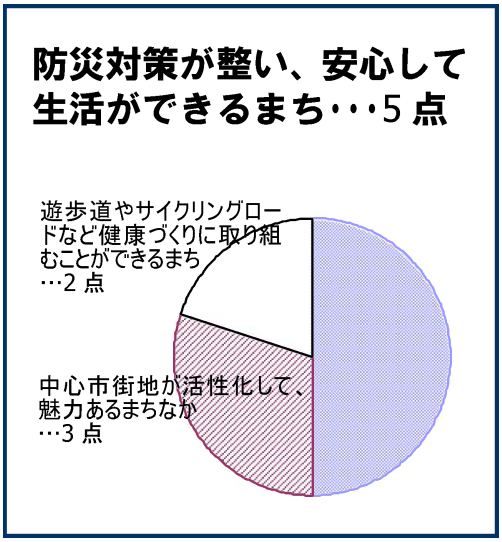
●浜松市版リサイクルシステムの構築を!!

行政には、リサイクルシステムの構築をお願いしたい。

当社では、食品を扱う企業として、消費期限切れなどで日々食品廃棄物が発生している。現在、浜松市にはリサイクル施設がないので、すべて焼却処分している。イオンなど全国展開している小売りスーパーでは、自前で肥料等にリサイクルする施設を持っているが、現状で当社単独の施設を保有することは難しい。

その他、環境面については、省エネの観点から、店舗の新設や改装の際は、LED 化を積極的に進めている。これについても、行政からの助成や優遇措置などを検討してもらえるとありがたい。

防災面においても、地域貢献できればと考えている。静鉄ストアの店舗で、有事の際に炊き出し釜として使用できる屋外のベンチがテレビで紹介されていた。このような先進事例を研究し、当社でも積極的に取り入れていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

杉山（すぎやま）　丈壱（じょういち）さん

浜松市水防団団長

［杉山丈壱さん］
防災で重要なことは、地域でのコミュニケーションだと語る。

●防災に対する地域のコミュニケーション

防災で重要なことは地域住民のコミュニケーションではないだろうか。水防団は、市民を水害から守るため、日頃から水防訓練や、ボートを使った救助訓練などをし、水害に備えている。しかし、実際に大きな災害が起きた時、市民は避難をしなくてはならないことも起こり得る。そのような時は、やはり地域で助け合う事が必要だ。体の不自由な方、高齢で独り暮らしの方、小さい子ども、皆が逃げ遅れる事がない様、日頃から情報を共有し、コミュニケーションをとっていく事が大切だ。平素、ひとこと挨拶を交わすだけでも違うと思う。

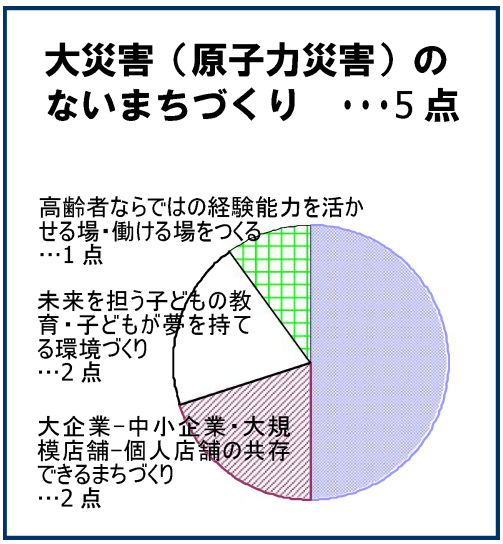
地域住民の間で、心の通い合う温かなまちになる事を望む。また、水防団員も高齢化が進んでいるが、若い世代にも興味を持ってもらえる様、地域の方との係わりを深めつつ、水防の重要性と魅力を謳っていきたいと思っている。

●高齢者に活躍の場を！

少子高齢化が進む中、少子化対策として、親が安心して働ける環境づくりが大切だと思う。子どもを預けられる場所がもっとあれば良いと思う。また、子育て経験のある高齢者に、シルバー人材として、保育士の補助で働く場をつくるのはどうだろうか。核家族化が進む時代において、高齢者と触れ合うことは、昔ながらの知恵などの伝承の貴重な機会にもなる。子どもから高齢者まで、皆がいきいきと元気に、やりがいを持って生活できる、活気のある浜松市であってほしい。

●まちなかに無料駐車場を！

車社会の浜松市では、多くの市民が無料駐車場のある郊外の商業施設に出掛けている印象を受ける。特に若い世代が、以前に比べて郊外に流れ、まちなかが寂しくなっているように感じる。まちなかにも、魅力的な店や場所が沢山あるにもかかわらず、気軽に駐車できる場所が少ない。例えば、2 時間は無料で駐車できる場所があったら、足を運びやすくなるのではないか。こうして、まちなかの魅力を発見し、人が集まり、賑やかになり、店も増えていくという相乗効果も期待できるのではないだろうか。



【浜松市への期待度グラフ】

●大災害に強いまち

浜松市は、自然も気候も素晴らしく、住み良いまちである。30 年後も変わらず、今の住み良いまちであってほしい。自然災害はいつ何が起きるか分からない。河川改修・堤防の整備・建物の耐震化・がけ崩れ対策・古い構造物のメンテナンス等をし、あらゆる災害に対応できる、まち作りが必要だ。また、人間が制御しきれない原子力（放射線）による災害は絶対に避けたい。

鈴木（すずき）　雅矩（がく）さん

市民協働センター勤務

自転車で１年半かけて日本を縦断した経験を持つ

企業スポンサーをつけてユーラシア大陸を横断したことも

浜松でコミュニティスクールを運営

[鈴木雅矩さん]
住んでいて楽しいまちを目指すためにも、生きることに希望が持てるまちになれば、と語る。

●市民協働を活発に！

大学卒業後に日本や世界中を自身の目で見て回ったが、浜松市は世界的に見ても産業が発達しており、市街地を含めて自然が豊かで、気候も良く、食べ物も美味しいと感じる。ヤマハやスズキなど世界的な大企業も多く、「やらまいか」精神の影響か、市民活動団体や NPO 法人の活動も活発。

浜松市を良くしていきたいと活動されている方々の間のネットワーク構築を担い、より良い活動ができるように手助けをしていきたい。

●出かけたくなる、市街地をつくりたい

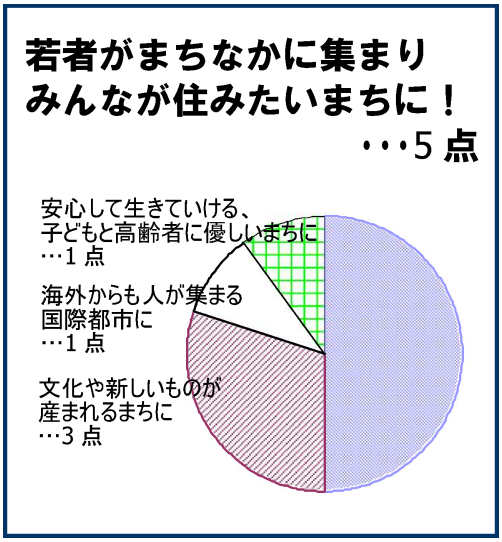
若者が大都市に集まる理由は、豊かな文化があるからだろう。
若者が住みたいまちの基準は、そのまちが面白そうかどうか。例えば、ぶらりとまちに出かけたとして、面白い発見や出会いがあるかどうかが、そのまちの文化水準を表していると思う。足を運びたいまちかどうか、全国の政令指定都市に比べると、浜松は弱点があると感じている。

建物をつくるよりも、どんな人に使ってもらうか。コミュニティをつくるのが大事。

●市街地に若者が集まり、新しい何かを生み出せるまちに

若者の間では、経済的な「タテのつながり」より、互いに興味関心が近い「ヨコのつながり」を大事にする人が増えていると感じている。実際に浜松にも、シェアハウスやコミュニティスクールなどが生まれてきている。人と人とが出会うことで自然と新しい事が生まれる。

市街地に、ユニークな発想や、行動力を持つ若者たちのたまり場があれば、そこから新しい何かが生み出される可能性は大きくなるのではないか。市街地に、鴨江別館やかぎやビルなど、魅力ある場が増えてきているので、その流れに乗って自分も新しい何かを生み出したい。



【浜松市への期待度グラフ】

●安心して生きていけるまちが理想

若者を集め、新しい何かを生み出すためにも、安心して生きていけるまちづくりが必要。

世界の国の幸福度を見てみると、北欧諸国のような「税金は高いが社会福祉が充実している社会」は幸福度が高い。これは医療・福祉・教育など、国民が生きることへの不安が少ないからではないだろうか。

長いスパンで見たときに、暮らしやすいと思えるまちには人が自然と集まると感じている。

浜松がそうしたまちになる手助けをしていきたい。

鈴木（すずき）　研一郎（けんいちろう）さん

映画監督

[鈴木研一郎さん]
市内で大ヒットを記録したオール浜松ロケ・キャストのミュージカル映画「プレイヤーズ！！」を制作。

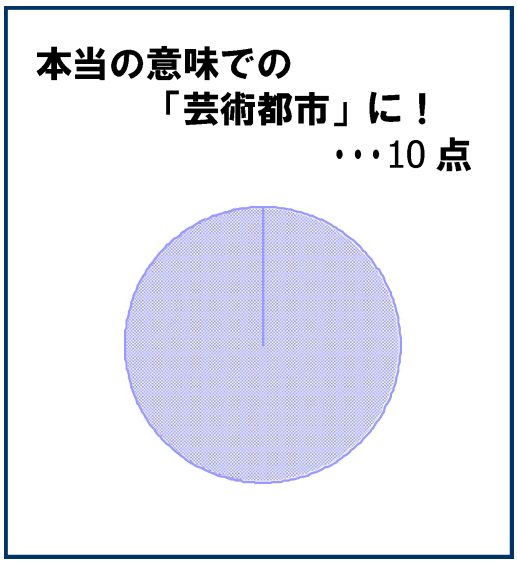
●プロが育ち、活動できる環境を！

クラシック音楽に限らず、ポップ、ロック、ジャズ、演歌などあらゆる分野で活躍しているアーティストたちが浜松におり、クオリティの高いアマチュアが多い。反面、「アマチュア」というカテゴリーが成立するため、プロの輩出が妨げられている。浜松が、真に「音楽のまち」となるためには、クオリティの高いアマチュアを更に突き抜けるレベルの人が出て、プロとして生活できる環境でなければならない。そのためには、地元のアーティストを支援する集団や仕組みが必要である。

映像制作の分野においてもプロが育つ環境が整っていない。映像関係の仕事に就きたいという希望があるがどうしたらよいか分からないと地元の大学生から相談を受けた。本当の意味での「メイドイン浜松」の映画は、地元に人材、機材、バックアップしてくれる存在が揃っていないとつくれない。この分野も音楽分野と同じように育成する環境を整える必要がある。

●フィルムコミッションのあり方を考える

浜松市内には、映画撮影に相応しい美しい自然や趣深い町並みがある。その一方、風が強く、録音やメイクなどの面で撮影しにくいという不利な状況もある。このような状況下において、浜松が芸術都市として映画撮影が活発に行われるためには、地域での支援のあり方を見直した方がよい。浜松にもフィルムコミッションがあるが、交渉先を紹介するだけというのが実情である。他市には、ロケ地の斡旋のみならず、ロケバスや弁当の手配までも行う NPO 法人組織のフィルムコミッションもある。このような支援があると、映像制作関係者は、「また、ここで撮影しよう」という気持ちになる。人材育成も含めて「撮る環境」が整っていくことを望む。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松を盛り上げるためには・・・

浜松市で面白いイベントが開催されても、そのときは人が集まるけれど継続しない。運営がボランティア主体であり、「より良くしながら継続する」という意識が薄いのが原因だ。プロのイベンターが必死に企画するようになれば、継続したイベントとなる。ただし、プロのイベンターが活動するには、公もしくは援助者からの支援が必要である。また、浜松の市民性として、短期で完全燃焼する性質で、ノリが悪いといわれる。市民が特定の期間だけでなく、日常的に楽しむことを覚えれば、浜松はもっと盛り上がる場所になる。

鈴木（すずき）　純哉（じゅんや）さん

（公社）建築士会西部ブロック浜松地区

［鈴木純哉さん］
最近では、耐震補強に併せて、リフォームする家も多くなっていると語る。

●地域にあった優良ストック住宅を！

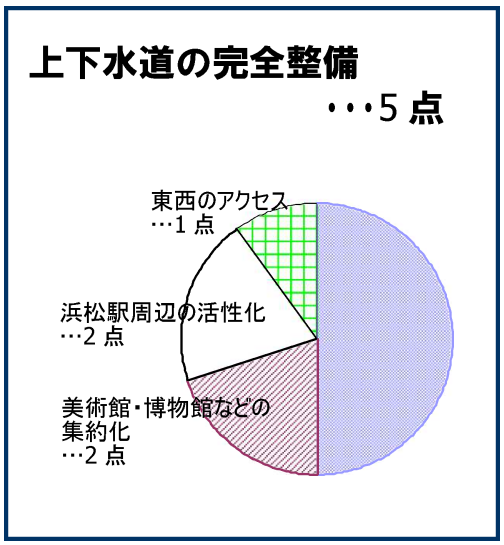
近年、長期優良住宅制度のように、住む人が手を入れながら、長く住み続けられる住宅づくりが推進され、また、高気密・高断熱の省エネ住宅の普及が進んでいる。30 年後を見据えた住宅の在り方として、現在の流れを受け継ぎつつ、より地域に合った住宅が増えればと思う。浜松では、地震対策が重要なポイントとなるが、県内の建物は他の地域より、構造計算上シビアに設定されており堅牢な建物となっている。既存住宅の耐震性向上についても、耐震診断及び補強計画の経験上、助成額の設定の見直しにより、今よりも進む事が期待できる。行政として必要な支援を行ってほしい。

●歴史的・文化的まちなみの整備を！

浜松は、ものづくりや自然環境などの魅力が多いものの、歴史的・文化的な点が弱い印象。掛川城のように一つのコンセプトに基づき、公共施設のみならず、民間の店舗や住宅も一定の規制のもと、統一感あるまちなみを形成することで、歴史・文化面での浜松の顔が見えるのではないか。具体的には、浜松駅から浜松城公園までのルートを、一つの歴史的なイメージで統一的に整備し、人の流れを作っていき、必要に応じて景観上の規制をかけることも考えたい。

●広大な市域に合った都市整備を！

浜松は、合併により広大な市域を有することとなったが、現在の浜松駅周辺や東西の交通アクセスの状況などを見ると、現状を踏まえた都市計画が必要ではないか。例えば、駅周辺には機能を集積し、美術館や博物館、特産物のアンテナショップなど、人を集めるための施設を設置することが有効と考える。また、浜北駅等から新都田を結ぶ公共交通機関の整備により、市域内の交流や活動を活発化させることができるのではないか。また、上下水道の完全整備より市民の生活が向上するのではないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●土地利用規制に一工夫を！

建築の仕事上気づくことだが、いわゆる二項道路問題は、緊急車両の乗り入れなど公益上必要な規制として総論では理解されているものの、実際にセットバックしなければならない市民には、不満も多い。このほか、風致地区の規制など、土地利用や開発行為には公益上必要な規制がたくさんあるが、規制だけでは市民の理解が得られにくい。行政が政策を進める上で、規制をかける際には、補助金などの給付措置とセットで行い、実効性を高め、スムーズに整備を進めるよう、工夫してほしい。

鈴木（すずき）　孝裕（たかひろ）さん

静岡県弁護士会浜松支部

[鈴木孝裕さん]
音楽のまち浜松とういことだが、音楽文化は未だ市民に浸透していないと感じる。

●市民幸福度の高い成熟したまちを！

浜松は、製造業中心の産業構造であり、ものづくりのカルチャーが、経済のみならず市民生活の全体に根付いている。

こうした特長は、産業集積や地域の発展に寄与してきたが、一方で、文化・教育・食やファッションなどにあまり関心を払ってこなかったのではないか。

グローバル化や情報化時代にあって、浜松が更に発展するためには、従来の縦割りの社会構造を打破し、交流型・循環型の社会に変えていくことが求められている。

また、新規産業の育成などにより、産業構造の多様化を図るとともに、特色ある文化教育による人づくりに励み、市外からも有為の人材を集め、まちの多様化を図りながら、成熟した民主主義を導いてほしい。

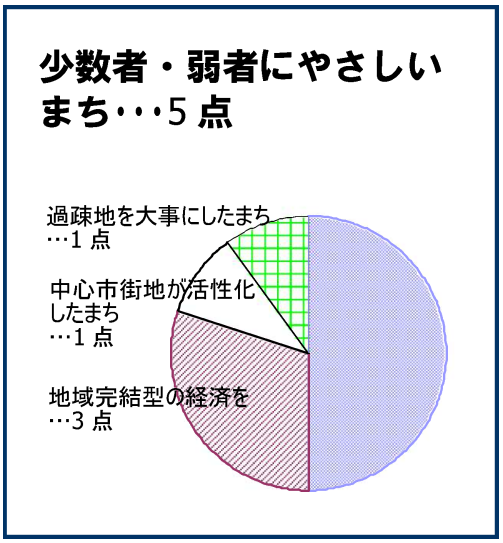
●市民本意の柔軟な行政の実現を！

包括外部監査をはじめ、行政と業務上関わることが多いが、政令指定都市となった上、近年のコンプライアンスや個人情報保護などの影響からか、行政が官僚化・硬直化してきていると実感する。行政は、市民の目線に立って、市民の幸福のために仕事をすることが原点であり、法の支配は、単に決められた制度を杓子定規に運用することではない。生活保護など給付の見直しが国で進められる中、市民にとってあるべき福祉の水準を確保するためには、制度にとらわれず職員の専門性を高め、柔軟な発想で政策を行うべきである。

●中心市街地の活性化を！

浜松の地域の特性からか、サービス業や商業が弱く、他都市と比べても、まちなかが本当に寂しい。百貨店など、これまで中心市街地の核となってきたビジネスモデルが、時代の変遷とともに行き詰まる中ではあるが、都市回帰の流れから高齢者も子育て世代も、駅周辺のマンションに数多く移住している。こうした人達の需要を取り込む施策で、中心市街地が再び活性化するのではないか。

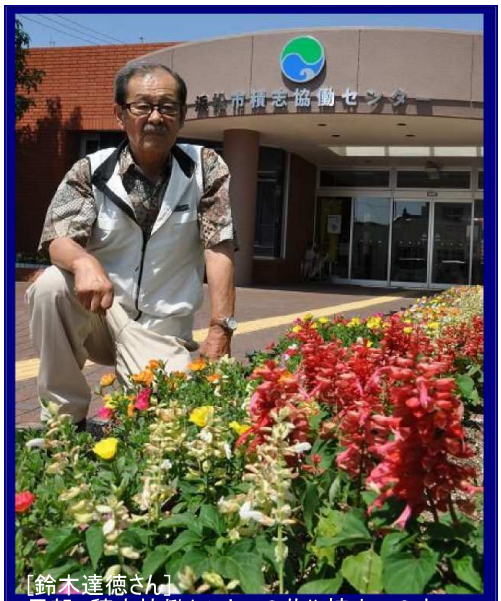
それとともに、市民や観光客など、様々な人を集め回遊させることが大事。案として、路面電車を敷設することや、市庁舎を建て替え、分散した市役所機能を集約するとともに、図書館やレクリエーション、スポーツ施設等を併設するなど多機能化を図ってみてはどうか。



【浜松市への期待度グラフ】

鈴木（すずき）　達徳（たつのり）さん

浜松市街路樹愛護連絡協議会　会長



［鈴木達徳さん］
早朝、積志協働センターの花や植木への水やりが日課となっている。

●津波対策の充実を！

地震は防ぐことはできないが、津波は対策を講じれば防ぐことができる。住民の防災意識が低いと感じることも多く、防災教育の啓発は大切なことと考えている。

東日本大震災の教訓から、広大な市域を活かし、津波被害が想定される地域の住居や工場は、数十年かけてでも、内陸部へ移転すべきと考える。

これと併せて、海岸沿いの低地を農地として集約化することで、より強い浜松方式の農業を構築するべきではないか。

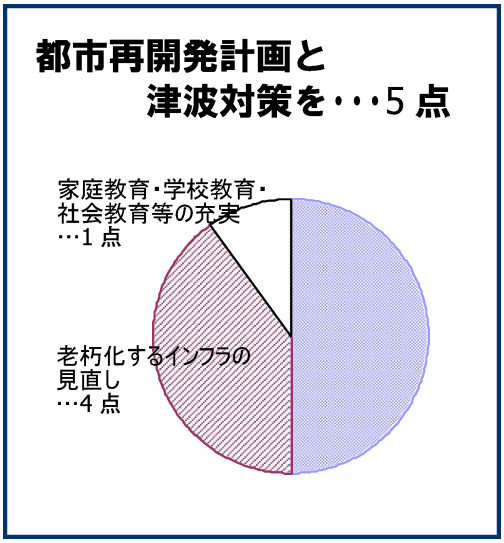
●高齢者が活躍する社会の実現を！

団塊の世代を始めとする、様々な知識と経験を持った高齢者が増えている。

こうした財産を十分活用するため、高齢者が活躍できるボランティア等の場を用意する必要がある。「老人力」を活用し、社会に貢献するような仕組みづくりを図るべきである。

●インフラの老朽化対策を！

橋梁ケーブルの変状やトンネルの崩落事故などのニュースを、最近よく耳にするようになり、インフラの老朽化を心配している。また、市は庁舎が手狭なため、あちこちの民間ビルに分散して間借りしている一方で、県の総合庁舎は、市民があまり利用せず、随分空きスペースがあり、矛盾を感じる。また、特別支援学校の移転も、県市の調整が十分進んでいないと聞く。インフラや公共施設等の管理など、県と市が協力し合いながら、対応していくべきである。



【浜松市への期待度グラフ】

●社会的規範を教える力が弱体化！

地域に住む学生や若者等の、ごみの分別マナーなどを見ても、最近、社会的規範などを教える力が、地域全体で弱まっていると感じる。学問だけに特化せず、家庭・学校・社会での教育を充実してもらいたい。

●一言で語れる浜松の特長づくりを！

日本の敗戦で、上海からあこがれの日本（浜松）に10 歳の時に帰郷し、60 余年。浜松に生活し、愛着を持っているが、近年、浜松の特長がぼやけてきた感じがする。一昔前であれば、楽器、織物、バイクなどが挙げられたが、今は違う。市外から来た人は音楽のまちというイメージがあるようだが、市民感覚としては、あまり感じられない。

鈴木（すずき）　建也（たつや）さん

T-PRODUCE　地域プロデューサー

［鈴木建也さん］
この地域が世界の音楽に与える影響力は計り知れない。それをもっと活かしていければと語る。

●浜松市のオンリーワン

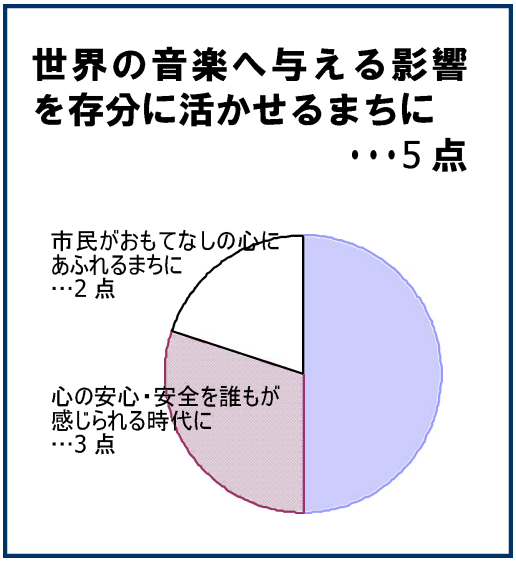
浜松市は輸送機器産業を中心としたものづくり、温暖な気候、豊富な自然、多種多様な農産物・海産物など、誇れるものはたくさんあるが、ナンバーワンでありオンリーワンであるものは、間違いなく音楽である。世界で唯一の総合楽器メーカーがあることはよく知られているが、全国の子どもは浜松でつくられた楽器を使って育ち、聴衆の視線をも計算してデザインされた楽器は常に世界のトレンドとなっている。このまちが世界の音楽に与えている影響は計り知れないが、市民がそのことを自覚していない。自負心を持って、音楽の街・浜松を目指してほしい。

●端の文化がやらまいかスピリットの源

欧米が世界の文化、産業の中心であった頃、アジアは世界の端であり、その中でも日本は世界の端であった。やがて鎖国していた日本が開国を迫られるが、外国船がやってきたのは大規模な港がある横浜や神戸である。そうした都市からの外国文化の流入経路からすれば、浜松は日本の端であった。浜松市民の気質として知られているやらまいか精神は、ハングリー精神と近いものがあると感じる。県庁所在地でもない浜松市が独自性とやらまいか精神で発展してきたいのは、これまでの端の文化が源ではないかと考えている。

●家康くんを浜松市民の模範に

現在、浜松市福市長　出世大名家康くんをゆるキャラ日本一にすべく、市のお手伝いをしている。家康くんの知名度はうなぎのぼりであるが、あくまで日本一は目的ではなく、その先の展開が必要である。家康くんの知名度があがれば、様々な出番も増える。知名度の高いキャラクターであるからこそ、イベントごとに異なった対応をすることなく、おもてなしの気持ちを持ったキャラクターであってほしい。またそれが市民性として根付いてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●少欲知足

豊かさの尺度がモノからココロへシフトしてきたと言われてきてしばらく経つが、まだまだヒトは心の豊かさを追求しているとは思えない。豊かさや幸福感は、欲望を分母に、財産を分子に置いて測ることとなるが、欲望が大きければそれだけ充足感は得られない。少欲知足（欲を少なくして足ることを知る）気持ちを一人ひとりが持ち、心の時代への移行が大切であり、音楽がそのきっかけになればいい。

行政へも、物理的な安心・安全を保障するインフラ整備とともに、心の安心・安全に対するケアへの重視も期待したい。

鈴木（すずき）　俊宏（としひろ）さん

株式会社大場上下水道設計／浜松ウインドオーケストラ（吹奏楽団）

[鈴木俊宏さん]
市街地の水道施設や北遠地区の簡易水道、飲料水供給施設の設計を手掛ける。吹奏楽団ではサックスを担当し、チャリティーにも尽力。

●被害の最小化と格差のないインフラ整備

水道施設は、市民生活を支える重要なライフライン。市では、東海地震や東南海地震が危惧される中で幹線の更新や管路の耐震化を進めてきている。地震などの有事の際、被害を最小限に留められるようになってほしい。

日ごろ、天竜区佐久間や水窪などの道路や水道等のインフラ整備がまだ不十分だと感じる。限られた予算で、過疎化の進む地域に多くの配分が難しいことも分かるけれど、市街地に住む市民と同レベルの豊かさを享受できるよう、地域格差のないインフラ整備を望みたい。

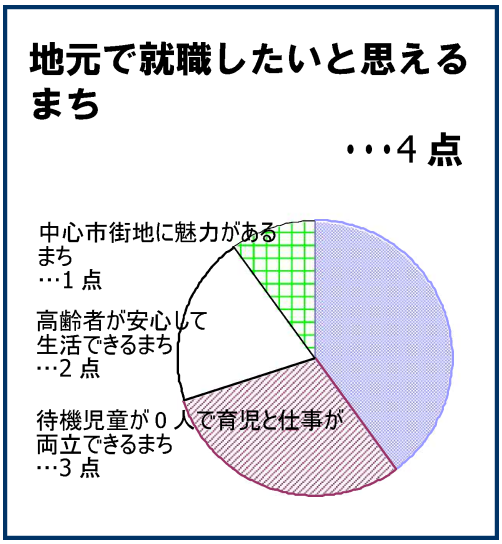
●音楽を通じて続けたい「東北支援」

高校生の時から楽器を始め、現在では浜松ウインドオーケストラに所属し、年 1 回の演奏会や市民吹奏楽団の合同演奏会等に参加している。「音楽のまち」として発展するには、まず音楽に興味を持ってもらえるよう、音楽と触れ合える場が必要ではないか。毎週どこに行けば聞けるのか、催しの周知が重要であり、音楽をしている人とそうでない人との隙間を埋めていきたい。

さらに、最近では、東日本大震災からの復興のため、市内で他の団体と共にチャリティコンサートを開催し、東北吹奏楽連盟に義援金を贈る活動を始めた。私たちにできることを考え、今後とも音楽を通じて、支援を続けていきたい。

●求む！待機児童ゼロと山間地域へ若者が移住できる環境

かつて私の長男も待機児童だった。横浜市はすでに待機児童ゼロを実現し、浜松市は 269 人（平成 25 年 4 月 1 日現在）と県内で一番多くなっている。市では、認可保育園の新規開設や既存の保育園の定員増等の整備を行っているが解消されていない。これまで以上の対応に期待したい。また、山間地域では、若い人が少なくてさびしく感じる。山間地域へ目が向くようにして、若い人が移り住み、子育てができる環境が必要だと考える。



【浜松市への期待度グラフ】

●ごみの有料化で新たな対策の推進を

今年度から専用ごみ袋の使用を始めて、粗大ごみが有料となった。より一層、ごみの減量を進めるために、家庭の燃えるごみの有料化を考えてはどうだろうか。公共施設を使えばお金がかかるのだから、ごみも同じだと考える。ごみ処理には、収集、焼却、処分、施設の建替え費用も掛かることから、排出者の市民がある程度負担すべきではないか。そうすればごみが減り、焼却施設は長持ちするはず。浮いた費用や排出者の負担で得た分で福祉や雇用対策等を推進してもらいたい。

鈴木（すずき）　政成（まさあき）さん

天竜区自治会連合会会長

[鈴木政成さん]
自然の魅力溢れる浜松をもっと PR して中山間地域が活性化してほしいと語る。

●「国土縮図型都市」浜松

浜松市は、北に全国に誇る天竜美林（日本三大美林）、南に遠州灘、東に天竜川、西に浜名湖があり、自然に囲まれた都市である。また、佐久間ダム、秋葉ダムなどの水力発電に加え、近年では日照時間が全国 1 位である優位性を活かして太陽光発電の普及を推進しており、クリーンエネルギーについても豊富な都市である。

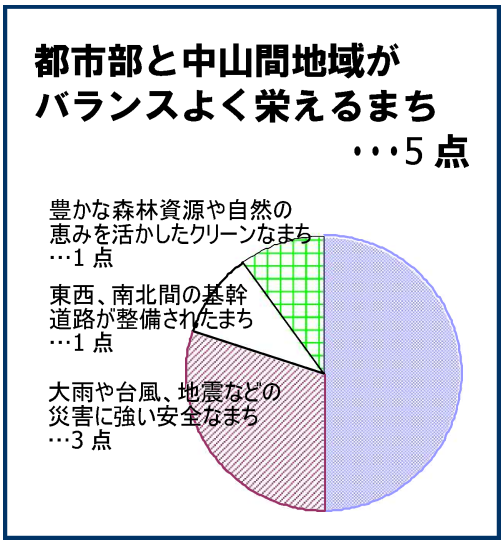
このように、海、湖、森林の中に都市空間が存在する浜松は、まさに「国土縮図型都市」であり、魅力に溢れ、多様性こそが強みである。

●オール浜松での盛り上げを

中山間地域と都市部を結ぶ南北間の基幹道路の整備が不十分であるため交流が進んでおらず、浜松の住民皆が一体感を持ってまちづくりを進めていこうという意欲が少ないように感じる。都市部には都市部の発展方法が、中山間地域にはそれに相応しい発展方法がある。中山間地域で林業を営んでいる私たちは、木材の暖かみや森林保全の大切さを、興味を持つ人へ効果的に PR し、林業を衰退させないことが重要である。森林資源が豊富な浜松市のクリーンなイメージを打ち出し、都市部だけでなく中山間地域もバランスよく栄えるまちになってほしい。

●林業に興味ある若者が中山間地域で暮らせるために

30 年後、旧龍山村の人口が半分以下になると予測されているが、この予測が外れることを期待したい。浜松市が持つ魅力には「つくった魅力」と「自然の魅力」があると思うが、中山間地域は「自然の魅力」の宝庫である。最近は「林業をやりたい」と言って龍山に来る若者が増えている。また、その中には龍山に住みたい、いわゆる「田舎暮らし」に興味がある若者もおり、都市部には潜在的に田舎に興味がある人がもっといるのではないかと考えている。中山間地域における遠距離通学対策や、森林資源を活かした雇用の創出、30 年後を見据えた林業振興策など、若者が安心して林業を営み、中山間地域で暮らしていけるような取り組みをお願いしたい。人口は少なくても、都市部の人たちに羨ましいと思われるようなライフスタイルを実現できるようにしていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●相互扶助の希薄化

この地域の自治会加入率はほぼ 100%であるのに対して、都市部の加入率は低いと聞く。30 年後の龍山の高齢化率は 80%との予測もあり、単純に、4 人の高齢者の移動、買物などの日常的な世話を、1 人の若者が面倒を見るということである。これでは自治会活動や地域における相互扶助が維持できない。

環境が大きく異なる都市部と中山間地域の自治会間の交流が進み、相互理解が促進され、市域全体での相互扶助の取り組みが進展することを期待したい。

鈴木（すずき）　政子（まさこ）さん

住宅用火災警報器設置推進会議（総務省所管）委員

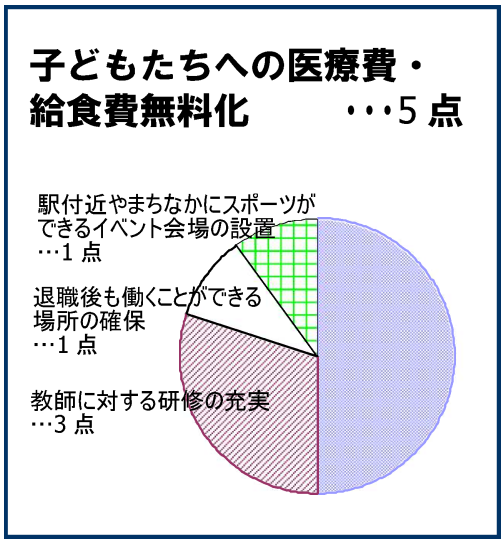
[鈴木政子さん]
防災に関する市民の意識が薄いと語る。

●防災に対する意識を高めたい

自主防災は地域活動を通じて盛んに行われているが、参加率や年代を見ると市民の皆さんの防災に対する意識が年々薄れてきているように感じる。『やらされている』『当番だから仕方なく』このような声を聞く事もしばしば。防災はまずは自分の身や家族を守ることが先決、最近では減災といわれ、家具の固定や硝子に飛散防止フィルムを貼ったりして震災が起きた時に自分の身を少しでも守ることが出来ないかという活動が盛んになってきている。私の地区には毎年、浅間地区婦人防災クラブ･地元消防団･自治会を中心として行っている江西地区防災フェスティバルがある。防災講話を行ったり、音楽のイベントで町民に参集頂き、起震車体験やはしご車体験、スモークハウスでの煙体験など様々な内容で町民に防災を身近に感じてもらおうと活動している。また炊き出し訓練では 1000 食のカレーライスを無料で配布したりして地域全体での参加率向上と防災力向上を目指して活動を続けている。実際に震災が発生した場合この浜松市は陸の孤島となる可能性が高く、すぐに援助が来るとは限らない。せめて 1 週間分の食料を備蓄していただけるよう声掛けを行っている。私自身、ガス爆発を身近で体験し災害の怖さを知っている。こうした経験を活かし地域における防災意識を高めたいと考えている。

●あいさつが飛び交う地域に

中学 2 年生向けに体験学習として仕事の場を提供している。子どもの経験として社会の実践の場を体感できることは極めて重要で、こうした取り組みを続けてほしい。最近は、挨拶のできない子どもが多く、親でさえ挨拶できないことがある。教師に対する教育・研修も充実させてほしいが､教師だけでカバーできない部分は､地域のボランティアに協力してもらうも必要。今後、自然と挨拶や会話ができる地域や人の絆が育ってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●スポーツができる広場をまちなかに

まちなかが寂しい。静岡市は大道芸で活性化に成功しているが､浜松市もまちなかに人が集まる工夫がほしい。人が集まることで､お金も動き活性化に繋がる。具体的には、スポーツやイベントが開催できる広場、駐車場を整備したらどうか。

現代は、車社会が進展しているため、駐車場のある場所に人が集まっている印象が強い。お客さんは、近くで駐車場がないお店より､遠くても駐車場のある場所を選んでしまっている。このため身近な商店街もなくなってしまった。

鈴木（すずき）　真弓（まゆみ）さん

モダンアート協会会員、浜松美術協会会員

「鈴木真弓さん」
造形作家として活躍。写真は、ご自身の作品「時の重なり」をバックに撮影したもの。

●「宝物」があふれているのに・・・

旅行に行った時、「浜松のように良いところから何で来たのか」と聞かれたことがある。また、他の観光地に行くと、「浜松にも似たような景色があるな」と思うことがよくある。浜松には旅行のツアーも十分に組めるだけの資源はあるが、観光に頼らなくても生活できる環境にあるため、危機感が薄く、このような「宝物」を活かしきれていない。住民が真剣に観光に取り組んでいる地域では、市民一人ひとりが観光客を意識して、周辺をきれいにするなど出来ることから始めている。

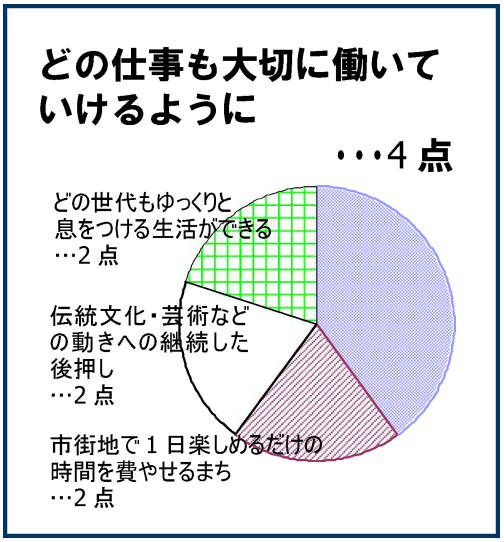
●どんな仕事でも尊重できる市民に

職業によって、あるいは、同じ会社の中でも業務内容によってランク付けされたりする現実がある。懸命に働いているのに職種だけを見て、「あのようになるな」と子どもに言ったりする親もいる。逆に、お金を稼ぐ人のことを悪く言う人もいる。どのような仕事にも価値があり、一生懸命働いてお金を得ることを恥じることはない。どのような仕事でも尊重できる市民になってほしい。

●芸術や伝統文化には継続した後押しを

芸術の観点からすると、市内には作品展示する場所が少ない。特に造形作家としてはインスタレーションができる場所がない。

また、イベントの助成金は年度ごとの設定で、次年度への準備資金に使えないことが残念だ。イベントを継続できるような仕組みにしてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●「息をつける生活」ができるように

子育てする母親の中には、話し相手や相談相手がいないなどの孤立した状況におかれ、息をつけない生活を送っている人がいる。また、一つの見解に過ぎないネット上の情報をまじめに完璧にこなそうとする人がいる。子育てに真剣に向き合っているからではあるが、頑張りすぎている気がする。「やらなければならない」という重圧にさらされているのではないか。

各々が無理をすることなく、できる範囲のことをすれば十分だと感じ、かつ、周りからのサポートも受けられるような「息をつける生活」を送れる社会になってほしい。

鈴木（すずき）　充代（みつよ）さん

東区協議会委員

[鈴木充代さん]
いつも笑顔でありながら、家事・育児と仕事の両立の上、東区の協議会委員までこなす。

●市民が暮らしやすいまちづくりを

浜松市は東京・大阪間の中間地点で、東名・新東名高速道路も走っており、物流の拠点になるなど、産業が発展する優位性がある。しかし、市民生活の観点から見ると、市内の交通ネットワークが未発達のため、車がないと生活に不便を来たす。超高齢社会に向け、移動手段を「車」から「公共交通」に切り替える必要がある。トラムの導入などを検討していったらどうか。

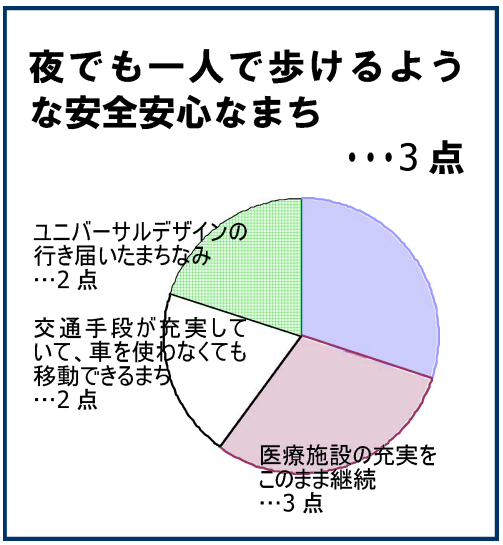
また、浜松の医療施設は充実している。今後の人口減少時代の突入により社会保障への不安はあるが、今の医療レベルは維持してもらいたい。

●みんなが知り合いになれば犯罪もいざこざも減る

高齢化、少子化が進んでいく中では、人と人とが助け合っていく必要がある。以前は当たり前にあった「地域コミュニティ」を改めて構築していかなくてはならない。そのためには、子どもに対する心身・心の健全育成を手厚くし、人との関わりを増やす教育が必要。結果、次世代の受け皿づくりにもつながる。「夢」であるが、みんなが知り合いになれば、犯罪もいざこざも減るはず。

●市役所職員は地域の「班長さん」

市役所の仕事は、サービス業、接客業である。職員はこうした自覚を持つとともに、地域の「班長さん」のような、身近に感じられる存在であってほしい。一方で、市民は何でも行政に頼るのではなく、自分たちでできることは自分たちでしていく姿勢が必要だ。お互いの距離感が少しでも近づけば、何事も双方が歩み寄り、「我が事」として課題解決に向き合える。



【浜松市への期待度グラフ】

●未来に向けて今からできる防災対策を

近い将来必ず大規模地震が来るという前提のもと、今できる対策をしなければならない。

個人として、地域として、市として、危機感を持って具体的に必要な設備、食料品の備蓄等、防災用品の充足や地域を挙げての訓練などを行っていく必要がある。例えば HUG 訓練（避難所運営訓練）を行うと、トイレが使えない状況になったらどうするか、あるいは、いろいろな立場、状況下の人が避難所に集まってきた時にどう対処するかなどを体験的に学ぶことができる。自らが体験することで、真剣に考えるきっかけとなるとともに、いろいろな立場に立った考え方ができるようになる。今から訓練の積み重ねが必要だ。

鈴木（すずき）　基生（もとお）さん

田町パークビル株式会社　代表取締役

[ゆりの木通りの万年橋パークビルの皆さん（左端が鈴木基生さん）]
万年橋パークビルでは、8 階をフリースペースとして貸し出しており、アート展示、アートパフォーマンスなどのさまざまなイベントが催されている。

●浜松は創造性豊かなモノづくりのまち

浜松は、挑戦的なモノづくりを行うだけではない。販路創造力を兼ね備えた職人がいる。繊維産業では、自らヨーロッパのアパレルメーカーやデザイナーに売り込んで直接取り引きをしている人がいるし、楽器産業でも、他にはないマウスピース製作の技術をもって独立している人もいる。アパレル店のオーナーから聞いた話だが、ヨーロッパでは、浜松のコットン生地は「日本のコットン」ではなく、「浜松のコットン」と言われているそうだ。これは、浜松市でバイク、楽器、テキスタイルなど嗜好に富んだ商品が製造されており、海外では極めて創造性豊かな街として受け取られているからである。

●まち全体の活性化を考える若者が報われるように

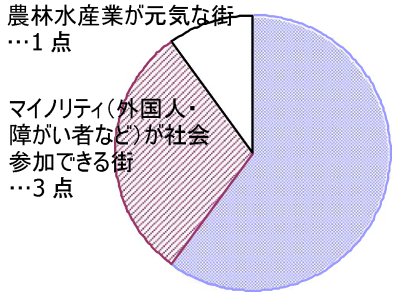
現在、20～30 歳代の若者が、自身の得意分野を活かして中心市街地のまちづくり活動をしている。こうした若者は、まち全体の活性化を考えて行動しているが、彼らの活動は、直接“お金”には結びつきにくい。「まちの価値が上がる」という成果が評価しづらいためでもある。活動している本人も何らかの方法を考えるべきであるが、行政として何らかの仕組みがないか考えてほしい。

●潜在的な魅力を顕在化するために

平成 17 年、ゆりの木通りで仕事を始めた当初は、商店街に魅力を感じなかったが、個々の店の中に入って店主と話すと、それぞれが専門知識に富み、こだわりを持って仕事をしていることに気付いた。これらの店は、チェーン店のように効率的ではないが、「人生を実のあるものにできる」可能性に満ちている。ただ、潜在的な魅力を顕在化する努力をあまりしていないし、自らがやりたいことを上手く表現できていない。店主が自ら考えて行動することが重要だが、私も商店街の中で、何らかのきっかけづくりをしたいと考えている。

また、まちなかのマンションの入居希望者には、退職後に浜松に戻ってくる人が多い。まちなかに住んでいるが、引きこもっているような高齢者もいる。今後、このような人たちが、「何となく」集まれる場所をつくったり、学生の協力のもと、まちなかガイドツアーを行ったりしていきたい。若者が昔からある店に興味を持ち、まちなかに住む高齢者は店先で昔話をする。お客さんも店主も楽しいまちを目指していきたい。

マクロ的に見れば経済が縮小しているのに、妙に熱中するものを持っている人の多いまち･･･6 点



【浜松市への期待度グラフ】

鈴木（すずき）　靖充（やすみつ）さん

防犯設備士

NPO 法人しずおか包括ケアネット e-ライフ支援　所属

国境なき肉団　団長

[鈴木靖充さん]
異業種交流を積極的に行い、横のつながりを深め見識を広げている。

●浜松市の市民性は“ひかえめ”！？

同世代の異業種交流を積極的に行っているが、静岡市と比べた浜松市の事業者の傾向としては、代替わりが進んでいない感がある。若い世代が上の世代に遠慮していると感じるときがある。

また、個々に活動する人は多くいるものの、積極的に横のつながりを持とうとする人は少ない。もっと連携していけばさらに効果が上がるのに、と感じることがある。

●地元の事業者が盛り上がれば、街中も郊外も発展する！

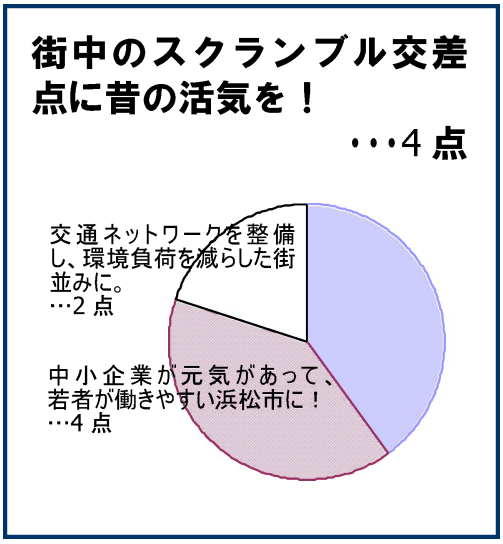
地元の中小企業が元気な街になってほしい。今後若者が減る中で、ニートが増えてしまっては困る。地元の中小企業が元気で、若者が働く環境を提供できれば、浜松はもっと良くなる。そのためには行政の支援も必要だろう。これは街中も郊外も同じことが言える。

昔の街中のスクランブル交差点は今の 10 倍の人の流れがあったという記事を見たことがある。我々が子どもの頃は、「街中に行く」ということは特別でわくわくどきどきしたものだ。ぜひそういう街中になってほしいし、ぜひスクランブル交差点の人の流れが復活することを望む。

●次の世代を育てる視点を。

地域の防犯力を高め、子どもが自由に外で遊べるような、安心・安全なまちづくりを望む。子どもの自由を保障することは、豊かな心を育む一助となると考える。

また、静岡市のとある小学校は、メルボルンの小学校とスカイプをつないでお互い自国語で交流をするという取り組みをしている。そして児童はその授業での「学び」をすごく楽しんでいるという。「学ぶことが楽しい」という教育は、前向き・積極的な社会人を育て、結果、地域に還元されるものであり、心を育てる教育に力を入れていくべきである。



【浜松市への期待度グラフ】

●「指導者」としての高齢者に期待。

高齢者には、これまで長年培ってきた知識や技術を次の世代に伝達する役割をぜひ担っていただきたい。それが高齢者個人の主体的なシニアライフであるとともに、「超高齢社会」における、地域の発展につながると考える。

聖隷クリストファー大学のみなさん

（1 頁目）

聖隷クリストファー大学社会福祉学部社会福祉学科 4 年生

左手前から　　一番奥　　右手前から
[豊田穂菜美さん][大場義貴先生][増田直晃さん]
[髙橋依里子さん]　　[山本隆弘さん]
[三浦愛実砂さん]　　[本目早知子さん]

社会福祉士や精神保健福祉士の資格取得のために日々勉強中。勉強や就職活動の傍ら、アニマルセラピーのボランティアに従事している学生も。

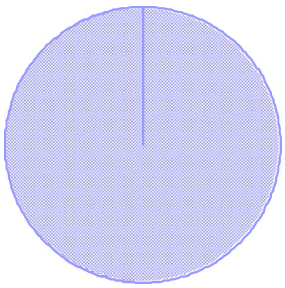
●音楽のまち！自然も豊か！

○音楽のまち。世界的な企業もあり、世界的なコンクールも実施している。
○自然が身近であり、中田島砂丘や浜名湖がすぐ近くにある。
○車があれば、交通アクセスが良い。またどこに行っても、ヒトが多すぎない。
○ボランティアをするにも、様々な団体が募集をしていて探しやすい。
○浜松まつりに代表されるように、地域の絆がある。

●まちなかに魅力を感じない・・・

○同じ世代同士で、遊ぶ場所が少ないように感じる。買い物でも、郊外の大型商業施設みたいに買い物に行く場所が決まってしまう。
○中心市街地が今後どうなっていくのかが不安。
○駐車場がないところは遊びに行かない。具体的に、映画を 1 本観に行くにしろ、駐車場有料の百貨店などではなく、少し遠いが郊外の映画館付き大型商業施設に行くことが多い。
○買い物で、駅前の品揃えに満足しない。また、服でも新商品の流通が遅い気がする。
○実際、買い物をするなら大型商業施設や県外。
○浜松駅前はまちなかとは思わない。
○飲んでも、夜遅くまで運行しているバスが少ないので、早く帰らないといけない。

障がい者、高齢者などすべての市民が安心して暮らすことのできるまち　・・・10 点



【浜松市への期待度グラフ】

●現在の専門課程を学んでの所感

○困難な事情を抱えている人たちがもっと政策決定のできる場、議論ができる場など、意見が言える場が必要なのではないか。
○外出が困難な障がい者や高齢者向けの宅配サービスが、安価でもっと使い勝手の良いものになってほしい。ネットスーパーも徐々に普及しているが、実際商品を見て買い物をしたい人もおり、宅配サービスとネットスーパーはメリット・デメリットがある。
○障がい者などが人とのつながりが保てるような、仕組みを充実してほしい。ささいなことで、すぐに孤立してしまう可能性がある。

聖隷クリストファー大学のみなさん

（2 頁目）

聖隷クリストファー大学社会福祉学部社会福祉学科 4 年生

左手前から　一番奥　右手前から
[鈴木郁恵さん] [大場義貴先生] [白崎菜奈さん]
[古川春子さん] [柴田隆さん]
[漆家友輝さん] [宮崎祐太郎さん]

大学 4 年生であるため、やはり就職活動が忙しいとのこと。中には就職活動が終わった学生さんは、人生を謳歌中…だそうです。なお、市の障害保健福祉課や精神保健福祉センターで実習された学生さんもいました。

●実習を経験して・・・

○社会のイメージが変わった。
○障がいを持っている人は、何かしらの壁があると思ったが、そのようなイメージはなくなった。自分たちと同じだと痛感した。
○膨大なケース記録を作成するのが、本当に大変だった。
○社会に出る前に、現場に出てより一層、精神分野で働きたい気持ちが強くなった。

●浜松人はドライな感じ？

○生まれも育ちも浜松市だが、ドライな人が多い気がする。サバサバしている？
○東京などから友達が来ても、紹介する場所がない。しかし、自然を見せると感動する。
○外国人が多い。ブラジル人学校もあるので、やはり身をもって感じる。
○伝承されている文化財が、有形無形限らずたくさん存在している。文化財を活かすことによって、観光資源になり得る。
○マンションよりも一戸建てを持つ人が多いイメージがある。

●市役所に言いたいこと

○市役所に行ったときに、クレームを言っている人にドライに対応していて冷たいと感じた。
○実際たらい廻しにされた・・。
○今も昔も、市役所が何をしているのかが見えない。
○障害保健福祉課と精神保健福祉センターへ実習に行き、様々な現場に同行したが、ケース対応を丁寧にしていた。実習に関しては、良いイメージしかない。

●自分たち、このまちの 30 年後は・・・

○いきなり 30 年後は考えられないが、10 年後は結婚していたい！
○子育てをするのは、浜松市が良い！
○子どもが生まれたらバスが乗りにくいので心配だ。
○今、精神領域では患者が急増しているが、今後様々な治療やサービスが行き届き、自分たちがいずれ必要となくなる社会が理想である。
○障がい者などに対する差別や偏見がないまち。正しい理解が進んでほしい。
○精神領域は、専門職が主導。しかし、家族や地域が参画し、みんなで支え合うまちになってほしい。

瀬尾（せお）　直樹（なおき）さん

市内企業勤務

［瀬尾直樹さん］
まちづくりにおいては、命を守ることが第一と語る。

●まちづくりの基本は『安全・安心』

将来の浜松市内の人口分布を正確にとらえ、災害対策や社会資本整備も「選択と集中」が必要である。

居住エリアはコンパクトシティを目指し、自家用車を使わない生活圏を確保することにより、二酸化炭素排出量を削減する低炭素化社会の環境を整備する。また、集住による余剰地では太陽光発電など再生可能エネルギーを創出する IT 技術を活用したスマートシティの取り組みも重要である。

二酸化炭素排出量の増加等は、地球温暖化をもたらし、その結果、海面上昇やゲリラ豪雨など大雨の頻発による洪水、土砂災害、高潮などのリスクが高まる。

●ハザードマップを正しく理解

津波や洪水などのハザードマップは、前提となる様々な条件を設定して作成される。

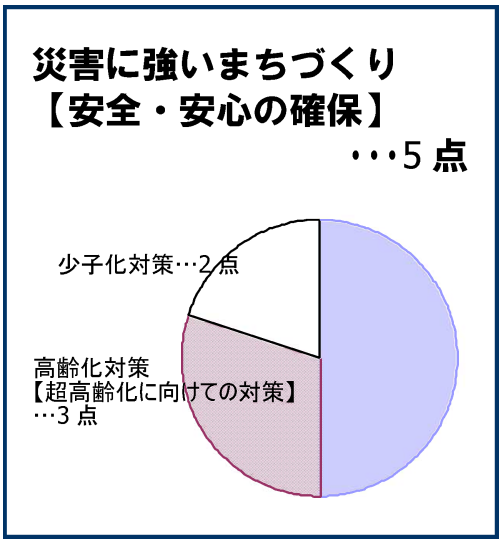
ハザードマップが出ると圏外の人たちが安心だと勘違いしてしまう。シミュレーションは条件よって変わるということをしっかりと市民に知らせる必要がある。

東日本大震災では、ハザードマップのすぐ外側で多くの方が亡くなっている地区もあるので、ハザードマップを絶対視する姿勢は良くない。

●防災教育は「繰り返し」がミソ

地形条件などにより、津波、洪水、土砂崩れなど各地域における災害特性は異なる。

地域ごとに様々な条件の災害シミュレーションを行い、時々刻々変化する状況をアニメーションによりわかりやすく表現することは、言葉で説明するよりも記憶に残るため、市民への浸透には有効な手段である。それを繰り返し行うことが防災教育には必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

●まちなかにワクワク感を

浜松のまちなかは活気がない。

もっとまちなかに行きたくなるようなワクワク感が欲しい。そのためには、規制緩和等により、若者が楽しめる、活気のあるまちづくりが大切である。

また、観光客には、『もてなしの心』を前面に打出し、リピーターとして来てくれるまちづくりを創造することが重要である。

関口（せきぐち）　淑子（よしこ）さん

コスモスこどもクリニック院長

[関口淑子さん]
家庭で、家族そろって、手作りの食事を囲むことの大切さを忘れないでほしい。

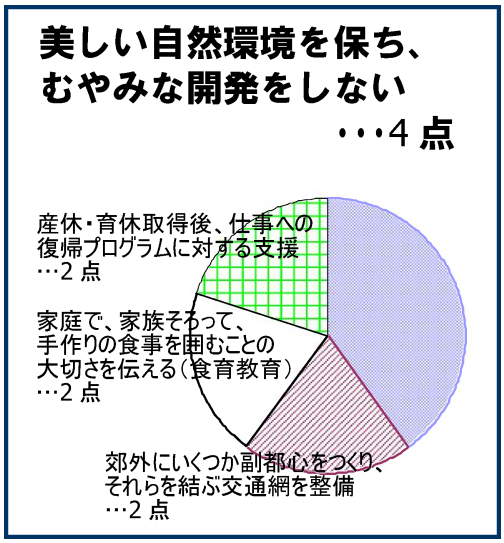
●家庭で自分の手で子育てが出来る環境整備を

昭和 63 年 2 月に浜北で「コスモスこどもクリニック」を開業。平成 20 年 2 月からは、子どもを持つ親のニーズに対応するため、日曜診療を始めた。日曜日に来る患者の約 90%は保育園児で、平日は親が忙しく、子どもの体調管理まで手がまわらず、重篤になって来るケースもある。

診察していて感じることは、子どもを保育園に預けて、働きたい（仕事に復帰したい）女性が多いということ。しかし、入園すると、幼い子どもは次々に感染症に罹り、身体は「免疫の嵐」に投げ込まれたような状態になる。あかちゃんの体が悲鳴を上げているのが聞こえるようだ。時代の流れもあり、生活のために忙しく仕事をしていると思うが、せめて子どもが 3 歳になるまでは、家庭でゆっくり育ててほしい。仕事への復帰はその後でよいと思う。

●働きやすい職場を目指して

私自身、仕事をしながら 2 人の子どもを育ててきたが、毎日が綱渡りのような生活だった。こうした経験を踏まえ、当院の正社員の勤務は、開業当初から、週休 2 日半、週 32 時間労働で今まで運営してきている。全体業務量に必要な人数より 1 人多く雇用する必要があり、雇用主として、給与や社会保険料などの負担は生じるが、「そのおかげで、母親として子どもに十分なことができた」と子育てを終えた従業員は感じていると思う。当医院と同じような取り組みをする企業が増えてくれば、女性も男性ももっと働きやすい社会になるだろう。



【浜松市への期待度グラフ】

●女性が多様な形で参加できる社会に

女性の社会参加は、自分が納得できる形で参加する、多様な形があってよいのではないか。

「1 歳から保育園に入れて、早く職場復帰をしたい。保育園をもっと増設してほしい。」といったマスコミの論調に踊らされてはならない。親の余裕のなさは、一番弱い子どもにしわ寄せがくる。30 年後という長い目で見て、行政には、「保育所をたくさん整備して、待機児童を無くす」のではなく、「子どもが 3 歳になるまでは、家庭で自らの手で育てられるような支援」や、企業等で「社員が育休から職場復帰するプログラム整備の支援」をお願いしたい。

曾根（そね）　晃一（こういち）さん

社会福祉法人聖隷福祉事業団

聖隷コミュニティケアセンター所長

【曾根晃一さん】
焼津市から毎日車で通勤。浜松市は天竜川、浜名湖、中山間地域など自然に恵まれ、過ごしやすい。また、浜松まつりなどを通じ、地域のつながり、結びつきが強いと感じる。

●利用者一人ひとりに最適なサービスを

当事業所は、在宅要介護者を地域で支えることを目的に 1990 年に開設し、福祉用具の販売及びレンタルを行っている。

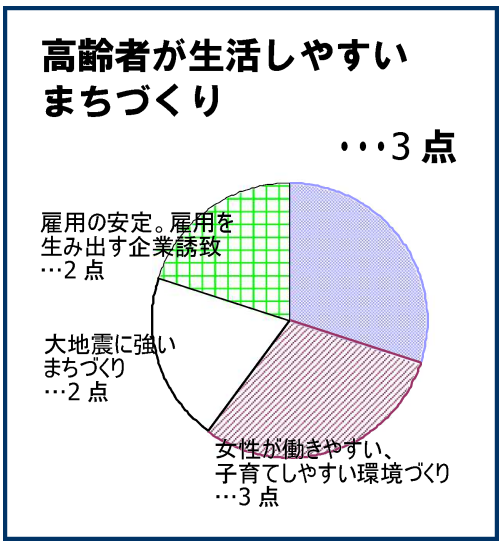
超高齢社会において、介護ニーズはますます高まっている。行政、医療、介護保険事業所などと連携し、利用者一人ひとりに適したサービスの提供を心掛けている。

福祉用具を利用することで、お客様の生活が楽に、スムーズになり、感謝されたときは仕事のやりがいを実感する。

●若い世代に医療、介護　を身近に感じてもらう

超高齢社会を迎え、医療、介護分野の必要性が高まることは必至である。それらを支える人材の確保は現在も難しいが、30 年後は更に生産年齢人口が減少し、より人材確保が困難となる。また、核家族化が進み、おじいちゃんおばあちゃんと同居する世帯が減り、医療、介護の必要性に関する実感がなかなかわかない場合もある。今からでも、30 年後を支える若い世代に、医療、介護をより身近に感じてもらい、その必要性や魅力を伝え、将来の仕事として選んでもらえるような取組みが必要である。

例えば、介護保険施設でのボランティア活動や医療、介護分野で働く人を講師とした授業、車椅子を施設や屋外で実際に使って、福祉用具の使用感やまちづくりのユニバーサルデザインの必要性を実体験する活動など、子どもたちの率直な感想、柔軟な発想が医療現場、介護現場でも生きるのではないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●だれかが近くにいてくれる安心感が必要

働き手を確保するためにも、女性が働きやすい環境づくりは今後さらに重要になってくる。当事業団も産休･育休を取得しやすい環境づくりに取り組んでいるが、幼稚園や保育園の整備も更に必要だろう。

また、高齢者がいつまでも元気で、活気ある生活が送れ、その力を活かせる社会になってほしい。そのためには、地域のつながりがより重要になってくる。高齢者の一人暮らし世帯が増加する中、他者との交流や趣味活動などができる場所を確保し、提供していく。だれかが近くにいてくれる、という安心感が大切である。

高根（たかね）　美保（みほ）さん

NPO 法人エコライフはままつ　理事

浜松市環境審議会委員

[高根美保さん]
NPO のコンセプトは「おもちゃ箱」。また来たいと思える、啓発施設を目指している。

●もう一度訪れたい浜松に

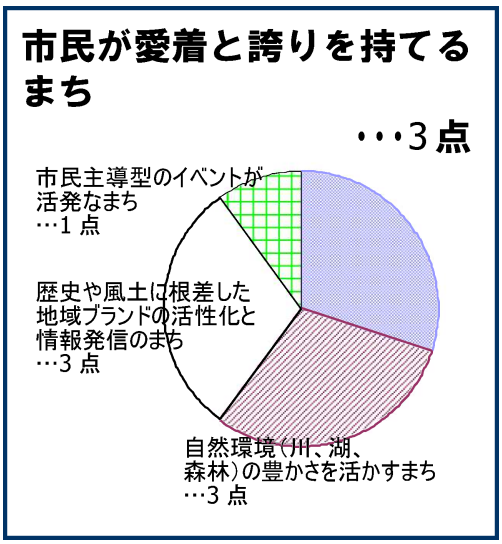
もう一度浜松にというリピーターはあまりいない。例えば、京都のような観光地は、1 年を通して見どころがあるが、浜松市はどの時期に訪れたら良いのかわからない。浜松市は面白みが足りないのではないか。浜名湖に行って、何をすれば良いのかわからないのが正直なところだ。浜松市の良さを市内外に、もっと発信して、「行きたくなるまち」、「住みたくなるまち」、「帰りたくないまち」と思われるようになってほしい。

●浜松市の見どころをアピールして

浜松市が様々なイベントを開催しているところは良いと思う。しかし、他のイベントも含めて、参加者はどこにも寄らずに、帰ってしまう人が多いと感じている。イベントがその場のみで完結している。浜松市には魅力的（私は昨年から動物園のイベントが好きでよく行っている。）なところがあるはずだが、あまり知られていないと思う。もっと点と点がつながる導線の工夫や宣伝をしてみたらどうだろうか。

●楽器のリユース活動を推進させたい

楽器（リコーダーと鍵盤ハーモニカ）のリユース事業を行っている。しかし、あまり普及していないのが現状だ。NPO 単独で楽器が集まっても、輸送費や送った先での指導などの必要があり、市民団体では海外の必要としている国を見つけることが難しい。リコーダーは、日本では使ったとしても義務教育期間の 6 年程度だ。しかし、リコーダーは約 40 年使うことができる。このような楽器を、必要としているところで使ってもらえるように、行政や民間にも協力してほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●将来 NPO 活動がなくなっている！？

今活動している NPO を通して、今後「西部清掃工場がどうなるか見ていきたい」という思いがある。これからの活動によって、ごみが減少し、将来清掃工場が建替えられる際には、規模が縮小されるようになって欲しい。そして、そのころには NPO のごみ減量としての取り組みは、「もうやることがない」となっていることが理想だ。そうなれば、ごみ関係の活動をしている NPO がなくなることになる。そんな未来になるように、市民が主体となって地球環境に配慮した生活を提案し、安全で住みやすいまちづくりを行いたい。

高橋（たかはし）　里織（さおり）さん

東区協議会委員

[高橋里織さん]
NPO 法人ライフプランサポート浜松の理事としても活躍中。

●「それだけ」でなく「＋α」を

浜松市は、浜名湖をはじめとした自然環境や景観がすばらしい。また、新幹線や東名高速道路など、東西のネットワークが充実している。ただ、個々には多くの観光資源があるが、他地域でも代替できる印象で、どうしても行きたいと思わせるようなインパクト、人を惹きつける魅力はまだ不十分だ。その結果、滞在されずに通過されてしまう。

本市の観光地を活かすには、単体ではなく、2 日間楽しめる複合的な提案、「＋α」の戦略が必要だ。

●音楽のまちとしてのブランド力を

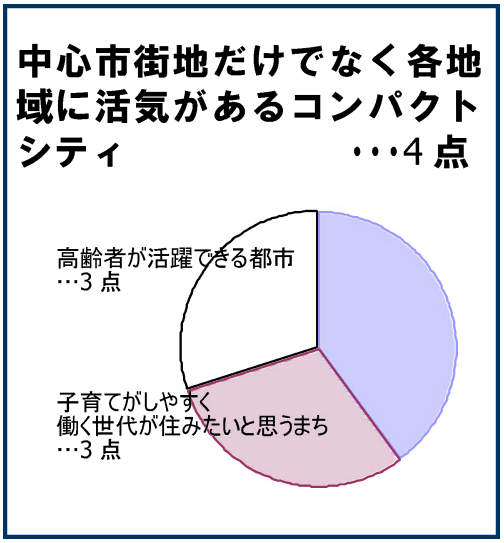
浜松は他都市に比べ、音楽が生活の一部となっている。子どものピアノのお稽古も一般的であり、身近に指導者もたくさんいる。また、浜松国際ピアノコンクールは若手ピアニストの登竜門として位置づけられている。さらに、浜松音楽友の会のような 30 年も続く任意団体があるなど、市民に音楽が根付いている。

音楽のまちウィーンを参考に、行ってみたい、住んでみたいと思われるブランド戦略が必要だ。例えばアクトシティは、エレベーター等、至るところに音符などを模したものをちりばめることで、コンセプトを明確にしている。そうした統一感のあるオブジェの設置や建物の修景により、訪れてみたい魅力あるまちづくりができる。

●防災教育の徹底

昨年度、区版避難行動計画が策定されたが、冊子配付後の周知はまだまだだ。南海トラフ地震の被害想定が出される中、防潮堤や津波避難タワー、耐震化などのハード面の対策はとられてきているが、個人個人の意識には未だ大きな違いがある。

例えば、区版避難行動計画を使用した出前講座を、小中学校で積極的に開催してみたらどうか。子どもの取り組みには親も関心を向けやすいだろうから、子どもから親、家族につなげて防災意識の醸成を図っていく。こうして 30 年かけて地震に備えていくことが必要だ。



【浜松市への期待度グラフ】

●きらきらしたまちへ

今の高齢者は元気なので、今後の超高齢社会においては、高齢者の活力と知識を活かすべきだ。例えば、若い世代が子育てと仕事を両立できる環境づくりに子守などで協力すれば、高齢者の役割ができ、地域全体で子育てを担うコミュニティづくりにもなる。

小学 2 年生の娘に未来の浜松がどうなってほしいか聞いたところ「きらきらしたまち」という答えが返ってきた。若い人が戻ってきたくなるような、魅力あるまちになってほしい。

高橋（たかはし）　ひょうまさん

市内企業勤務

[高橋ひょうまさん]
多文化共生のためには人と人が折り合いをつけてつながっていくことが大事と語る。

●マイノリティへのサービスを忘れずに…

優先順位は仕方がない…。

浜松では､｢外国人＝ブラジル人｣のイメージが強い。スーパーでもゴミ置き場でもポルトガル語の表記があり、その他あっても中国語。ブラジル人優先の外国人サポートが目立ち、少数派外国人へのサポートが弱いと感じる。

外国人への平等なサービスは理想だが、行政の予算には限りがあり、人口比率による優先順位は仕方がない。日本人が１番。その次はブラジル人。その中で、少数派のことを忘れずに、将来でも良いので必ず対応してほしい。

喫緊は医療分野でのサポート。生命に関わることであり最近の医療現場では１つずつ患者に確認しながら治療等を行うため、言葉が通じないと対応ができなくなってしまう。

●日本に来たなら日本語を！

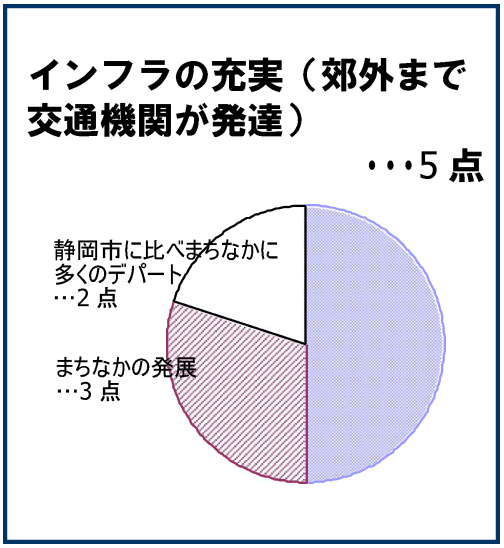
日本に来たなら日本語を覚えるべき。

ただ「不便」「暮らしにくい」などの不満だけを漏らす前に、ゲスト側も日本の言葉や文化を理解すべき。その上で提案・意見を口にし、両者の妥協点を見つける。一方的に何でもマイノリティに合わせて何かを変えろというのは、弱者の立場を利用した暴力になりかねない。

相手のことを理解し、折り合いをつけ、お互いが納得して、共に共存していくことが重要と考える。

●子どもにバトンをつないでいく

言葉、文化、生き方など、親から受け継いだバトンを子どもにつないでいきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

個人や個性が重要視され、人とのつながりが希薄化している気がする。子どもが、人との接し方や距離感を学べるのは学校だけ。そして、在日外国人労働者の収入は皆さんの想像よりはるかに低い。高校や大学の進学率を上げるため、受け入れ枠の拡大や奨学金の充実をお願いしたい。

将来を支えていく子どもたちに、多くの選択肢を与えたい。

●もっと HICE をアピール！

HICE が心の拠りどころとなってほしい。

外国人への制度やサポートの充実より、マイノリティでも相談できる場所があるという安心感が重要なので、もっと HICE の存在自体をアピールしていくべきだと思う。

鷹見（たかみ）　早苗（さなえ）さん

浜松市西区協議会委員

雄踏まちづくり会委員

[鷹見早苗さん]
世代間の壁がなく、多様な世代が共存できるまちづくりが必要と語る。

●これからの浜松市には市民の力が必要

これからはソフト面、特に社会福祉の分野では市民ボランティアの力が必要になってくる。企業が有料の福祉サービスを提供しているが、その報酬を支払うことが難しい方々もいる。また、世代間が助け合うことで、安心、安全なまちづくりをしていきたい。ボランティアの存在を知らない方もいらっしゃるので、浜松市には、各分野でのボランティア育成と窓口の拡充、PR に力を入れていってほしい。

●U ターンしたくなる浜松市へ

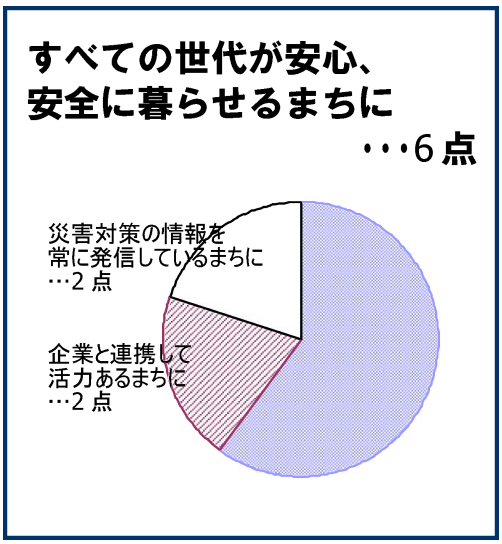
浜松市には、大学も多くはなく、進学先として大都市圏を選択する学生も多いのではないか。技術系以外の仕事も少ない。また、郊外が発展していく中で公共交通機関が発達しておらず、交通インフラ、ルールも不十分だと感じる。高齢者は不便に感じるだろうし、自転車を利用している学生は、危険を感じる場面も多い。公共交通機関の金銭的負担も少なくない。

今後、雇用面と都市基盤が充実すれば、若者が U ターンして地域の力が向上するのではと考えている。

●世代間の思いやりが大切

浜松市には、各世代が安心、安全で暮らせるまちになってほしい。自分の世代のメリットだけを意識して、まちづくりの要望をしてはいけないと考えている。それぞれの世代がそれぞれできることがある。特に災害時の対応においては、昔の方々の知恵を是非お借りしたいし、中学・高校生の若い力も活用したい。時には違う世代のための施策もあるだろうが、お互いを思いやりながら世代間で協力し合えるまちづくりをしていきたい。

また、浜松市には一流企業が多く存在するので、地元企業の方々にも協力をお願いしながら「浜松市だからできること」を発信していってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●地域コミュニティの重要性

自分自身が子育てを経験してみて、雄踏町は子育てがしやすいまちだと感じた。雄踏町が、子育て教室など多く主催し、地域では熱心に子どもパトロールも実施しており、母親としては安心できた。地域内での交流も多く温かいまちだ。

合併して、全体最適の追求は必要なことである。ただ、地域には地域の特色ある文化があり、例えば雄踏町には雄踏歌舞伎などの伝統が残っている。昔からの文化や伝統を守るのは、地域コミュニティであり、今後も地域のつながりが益々重要になってくる。

高山（たかやま）　春樹（はるき）さん

市内企業勤務

[高山春樹さん]
行政などのイベントへの参加はきっかけづくりが重要と語る。

●まちなかにワクワク感を！

広大な無料駐車場を備え、映画館も併設したショッピングモールなどが郊外にあり、わざわざまちなかに出てくる魅力がなくなった。

しかし最近は、街コンやほろ酔い祭りなど、日曜日や平日の夜の閑散としたまちなかを盛り上げるイベントが成功している。

まちなかを活性化させるイベントを市民から募集したり、日本人と外国人が交流できるイベントをまちなかで開催したりして、まちなかを盛り上げてほしい。

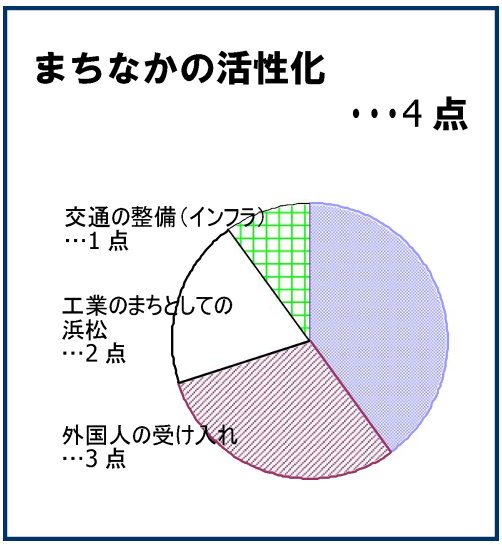
なお、郊外の住人にとっては、最終バスの時間が早いことも難点である。

●きっかけづくりが重要！

勤務先の関連で、まちなかの花壇を整備する「鍛冶町通り花飾り」やまちなかのゴミ拾いを行う「エコまち倶楽部」に参加した。「鍛冶町通り花飾り」では、都市緑化フェアが同時開催でダンスなどもやっていて結構楽しかった。

行政等のイベントは、参加してみると意外と楽しめ、何かのきっかけで１回参加すれば、継続して参加してもらえると思う。

浜松は暇つぶしをするところがなく、日曜日にやることがないということをよく耳にする。このような若者に、休日の過ごし方としてイベント情報を上手に発信できれば効果的ではないか。広報はままつが、若者や子ども向けの情報誌となっていないことから、ツイッターやフェイスブックを活用したり、学校等へ定期的に情報誌を配布したりするなど、情報発信に工夫が必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

●フラッと立ち寄りたい場所に！

浜松は、市域全体に観光スポットが点在しているため、市内を周遊して楽しむことができるが、一方でインパクトのある観光スポットが少ないため、観光地として中途半端という感覚は否めない。

今後は、東京と大阪の中間に位置するという好条件を活かし、観光情報を上手に発信することで、通過点ではなく、フラッと立ち寄りたくなる場所にしてもらいたい。

同じく今後の課題として、土地利用の規制を緩和し、調整区域に工場などを建設できるようにしてもらいたい。工場は雇用を生み出し、雇用拡大が犯罪の減少につながる側面もある。

髙山（たかやま）　ゆき子（こ）さん

多児サークル　ころころピーナッツ代表

［髙山ゆき子さん］
双子中心のサークルには、13 組ほどが参加。季節行事や遊びを活かした支援を実施。双子の母。

●自然の中で遊ばせてあげたい

浜松を転勤で訪れている方から耳にするのは「住みやすい」という声。浜松には、海と山を含む豊かな自然があり、気候もよく、その中で子どもたちを育てることができるからだろうか。子どもたちが中学生になると部活や勉強で忙しくなるので、せめて小学生のときだけでも思う存分、自然の中で遊ばせてあげたいと思う。

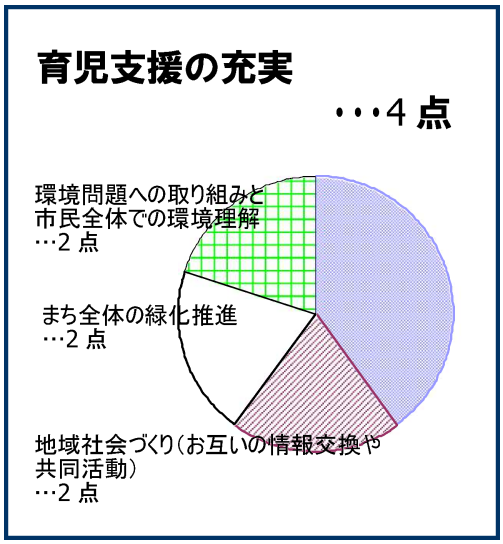
●笑顔で楽しめるサークルに

最近、多児が多く見られるように思う。子育て支援の場があっても、忙しい日常の中で、一歩踏み込むことのできない親も多い。サークルでは、多児を育てる際の何気ない愚痴が言えたり、情報交換ができたりする場として、子どもたちへの絵本の読み聞かせや季節の行事を取り入れた遊びを中心に活動を進めている。参加してくれた親からは、サークルで話し合え、救われて、子育てのアイデアも得られ、特に家で家族に優しくなれたとの声もある。

子育てが思いどおりにならず、悩んでうつに近い状態になる方もいるので、今後は地域の方や保健師の皆さんとも連携をとり、サークルに来てくれる保護者や子どもたちが笑顔で楽しめるサークルを目指したい。

●負担が大きい保育料と見つからない就職先

他のまちと比べて、公立幼稚園の少なさが目立つ。私立幼稚園が決して悪いとは思わないけれど、多児の保護者にとって、高額な保育料が 2 倍、3 倍となるケースもある。金銭面での負担が大きく、パートで働かざるを得ない母親も少なくない。さらに、子育て期間が仕事上のブランクとなり、新たな就職先が見つからないこともある。少子化が騒がれる中で、子どもを望む夫婦にとって、保育料や就職の対策も必要ではないだろうか。



【浜松市への期待度グラフ】

●レトロな建物を残し、家康公の活用を

取り壊された児童会館や旧浜松測候所（気象台）の建物のレトロな雰囲気が好きだった。歴史ある建物の価値を認めて、レトロな建物を残していってほしい。そんな建物が似合うまちとして、市民全体で環境意識を高め、街道に落ちているごみや空き缶のクリーンアップを実施していく必要がある。

浜松には、家康の散歩道にある浜松城や東照宮、犀ヶ崖など、家康公ゆかりの場所も多いので、もっと活用していってもらいたい。それから、大人も子どもも楽しめて、体験できるような新しい美術館ができたらと期待している。

田口（たぐち）　剛（たける）さん

ウェブ＆グラフィックデザイナー

NPO 法人しずおか包括ケアネット e-ライフ支援　所属

[田口剛さん]
今後の少子高齢化の中、終活について考える機会を提供していきたいと語る。

●自然豊かで環境に恵まれた政令指定都市・浜松

浜松市の自然といえば、中田島砂丘、浜名湖、天竜川、北には広大な森林…と、浜松市域には、日本の自然が一通り揃っている。また、日照時間も長い特徴があることが大きな強みといえる。これほど環境に恵まれた地域はなかなかないのではないか。

しかし、広大な市域であるが故に、旧浜松市とその他の旧市町との間の一体感が、未だ低いのではないか。旧市町を盛り上げるため、イベント等の活動の活発化が望まれる。

●これからのまちづくりのキーワードは「防災・雇用・教育」

静岡県の第 4 次被害想定が示されたが、今すぐ取り組むべき短期的な対応とともに、今後、中・長期的な視点でも防災対策に取り組む必要がある。特に、津波対策は市民が安心して暮らすためにも、重点的に取り組むべきである。

また、働くことに興味がなく、その日暮らしの若者がいる。将来の浜松を担っていく世代であるので、雇用対策、教育に力を入れるべきである。雇用対策という点では、若者が魅力ある企業に出会える、あるいは自分のやりたい仕事が発見できるように、就業体験の充実など、行政としても取り組んでほしい。

●「終活」は“人生の最終章”を明るく前向きに過ごすための活動である

自分の人生の終末のためにする活動のことを「終活」と言うが、私が所属する NPO 法人では、シニアライフをよりよく送ってもらうお手伝いとして、「終活」を勧める取り組みをしている。

「終活」というと、一見ネガティブなイメージを持つかもしれないが、人生を前向きに、主体的に送るための活動である。それが今をよりよく生きることにつながると考える。例えば、一人暮らしの高齢者が増えているが、その方たちが対象の「婚活」なども反響がある。シニアライフを前向きに過ごす、良い例だと思う。

【浜松市への期待度グラフ】

また、「葬祭」も最近は様々である。最近は火葬のみを行う「直葬」が増えているが、費用が安いから選ばれているのではなく、家族のみでひっそりと最期を送りたいという想いから選ばれているようだ。他にも、故人の個性に合わせた「家族葬」など、ニーズもプランも多様になってきている。

今後の「超高齢社会」を見据え、市民一人ひとりがシニアライフを前向きに捉え、考えてほしい。

田熊（たくま）　恭子（きょうこ）さん、稲垣（いながき）　恵美子（えみこ）さん

NPO 法人　親支援プログラム研究会

[田熊恭子さん（左）、稲垣恵美子さん（右）]
2008 年に法人化。「ノーバディーズ・パーフェクト」のファシリテーターなど複数の資格を持つ。会員 32 人。

●誇大なくらいにアピール力を高めて

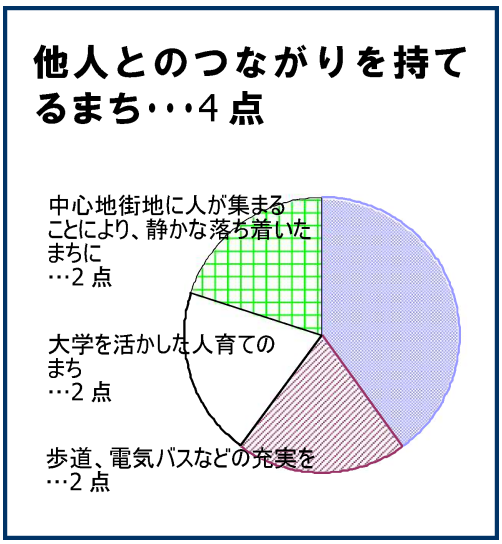
浜松は、自然環境に恵まれ、四季折々の野菜、フルーツ、魚などがとれて、食べ物の旬を楽しめる地域。他の都市に行って初めて感じた自然のありがたさがある。この地域をどうアピールしていくかがとても重要となる。例えば、餃子や音楽のまちとして、誇大なくらいアピールしてやっと伝わるのではないか。遠州地域の人間性なのか、はずかしいっていうのもあるけれど、もっと突き抜けた感じが必要だと考える。アピール力を高め、積極的に売り出していかなければ伝わらない。浜松はいいところだに！

●あったらいいな全大学生の社会体験

こんなに大学があるまちというのもすごい。就職しても現実とのギャップからか、すぐに仕事をやめてしまう新入社員もいると聞く。そこで社会体験として、キッザニアの大学生版のようなものはどうか。大学の 3、4 年生でインターンシップとして、企業体験をすべての学生が行う仕組みである。イメージで就職を選ぶのではなく、ライフスタイルで選ぶことが長く続けられる仕事選びのコツとなる。企業では優秀な人材を集めることができて、学生としても就職先を選ぶ際に役立てることができるメリットがあるはず。つまり、人育てのまちですね！

●子育て支援は自立支援

子育ての仕方が分からないのは、当たり前で最初から完璧な親なんていない。当研究会では、子育ての仕方、しつけについて考え、親（援助者）に子どもを自立させることを考えた子育てをしてもらうための活動をしている。子育てでは、日常の積み重ねと、少しずつカタチにしていくことが大切。活動を通じて、子どもたちが 30 年後に幸せでいてほしいと思う。そして、ひきこもらず、社会に出て世の中で役立つ、納税者に多くの人がなっていることを願っている。



【浜松市への期待度グラフ】

●研究するプロ集団として続けたい

子育て支援活動をしている仲間で立ち上げた研究会。今では保育士や幼稚園教諭、各講座のファシリテーターなど、資格を持つプロが集い、4 つの親支援プログラムを提供している。例えば、コモンセンス・ペアレンティング（CSP）では子どもとのコミュニケーションの取り方やしつけの方法を具体的に分かりやすく学ぶことができる。

今後も親の愛を伝え、丁寧にしつけをして、子どもに語りかけながら、自立をさせていくための支援を続けていきたい。

竹内（たけうち）　茂（しげる）さん

宮口まちおこしの会会長

（写真:左から阿部恒一さん、竹内茂さん、辻村昌男さん
太田富次郎さん、鈴木斉さん）

[宮口まちおこしの会の皆さん]
天浜線の沿線は財産。防災対策としても使える貴重なインフラなので、活性化を真剣に考えていきたい。

●まだまだ発展の可能性があるまち

浜松市は、山、川、海、湖など、自然が豊かである。浜北区においては、浜北森林公園が素晴らしい。

宮口には天竜浜名湖線の駅もあり、新東名高速道路開通の影響で交通量も増加した。資源はあるのでまだまだ発展の可能性があると考えている。祭りも盛んで、地域住民の交流が活発である。

●まちなかに行く手段がない！大変！

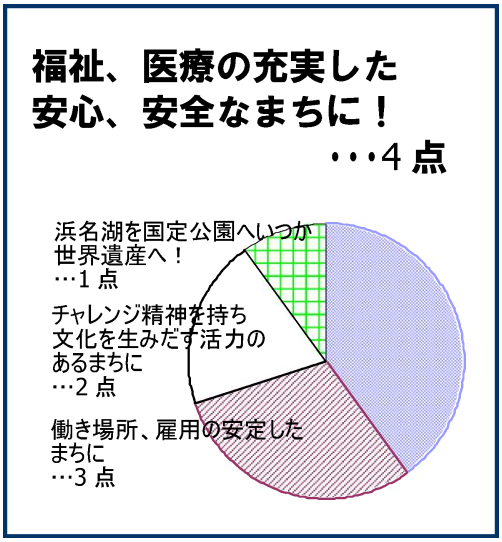
浜松市は、公共交通網が未熟ではないか。まちなかに遊びに行きづらいし、遊びに行きたいと思わせるものも少ない。音楽のまちを標榜しているが、同様の理由で音楽を身近に感じる機会も少ない。また、一人暮らしの高齢者にとっては、日々の買い物にも苦労してしまう。

地域の力で、一人暮らしの高齢者が集まる場をつくり、ゲーム、お茶会、食事会、買い物ツアーなどの企画もしているが、公共交通網の発達は、交通弱者には重要である。

●地域の良さを積極的に発信してほしい！

浜松市の病院には、他都市からも診療に来る方がいるくらい、医療に関しては充実しており雇用面も現状はそれほど悪くない。将来に向けても、医療、福祉を充実させ、高齢者が元気に安心して仕事ができる環境を整えてほしい。若者は稼ぎ、高齢者は地域に貢献していくサイクルができれば、地域社会も安定するのではないか。

基本的に浜松市は、安定した社会を形成していると感じている。しかし、より活性化していくために、例えば浜名湖の食材、環境資源や天竜浜名湖線のインフラ資産など、地元の人間では気づかないような地域の強みを発信していくことが大切である。加えて、文化都市という面が弱いと感じているので、新しい文化の創造にもチャレンジングに取り組んでいってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●手応えを感じている“まちおこし”

地元の歴史、文化的財産は地元の人間が守っていくべきものだと考えている。宮口は万葉の時代からの歴史あるまちなので、地域で守っていきたい。歴史的な地域文化にスポットライトを当て、みんなで再発見、掘り起こしをしていきたい。

宮口まちおこしの会は、年々参加者が増えており、若者の参加者も増加してきている。楽しい仕組みづくりができれば、若者も興味をもって地域活動に参加してくれる。その地盤を築き、次世代に受け継いでいきたい。

田代（たしろ）　剛（つよし）さん

株式会社東海トラベル代表取締役社長

[田代剛さん]
スポーツを通して、若者が集まり、活気あふれるまちになってほしいと語る。

●目指せ！スポーツコンベンション都市浜松

浜松市は市域内に海、砂浜、川、山があり、温暖であり、日照時間も長い。地元に住んでいると、この価値に気づかないが、これほど環境に恵まれた地域はなかなかない。

このようなメリットを活かして全国のスポーツ活動を誘致したい。プロ野球のキャンプの例でも明らかなように、スポーツ合宿はリピート率が高く、「出世の街」とのコラボレーションで、浜松で合宿を行うと強くなれるといったジンクスが生まれれば、スポーツコンベンション都市として、多くの方が訪れる。

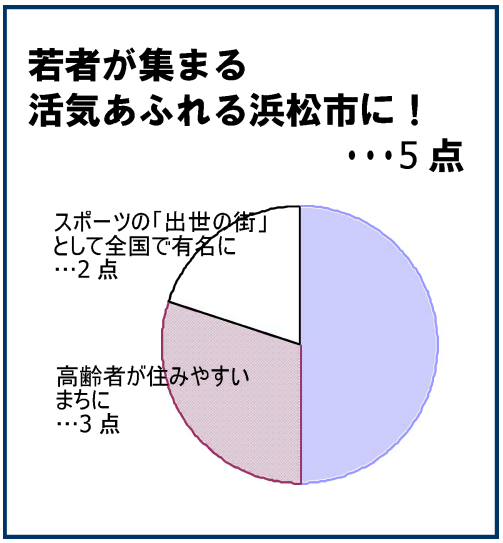
●誰もが健康で、活気あふれる街に

高齢者の割合が高まっていく中、高齢者に対して医療面や福祉面などでの住みやすさを充実させることが必要である。私も地域の方々が一体となって持って取り組めるスポーツの場を提供しているが、健康について考えていくことで医療費減にも繋がっていく。

●舘山寺をビーチパークに

スポーツはプレイヤーだけでなく、観戦している方も一体感が味わえることが最大の魅力である。私自身もビーチラグビーを現役で続けており、スポーツの持つ魅力を体感している。

観光業の視点で考えると、舘山寺の浜名湖岸をビーチパークにすることができれば、景観も更に向上し、ビーチスポーツでも賑わう。ビーチパークを活用した着地型の旅行商品により、若い旅行者が増え、まち全体が活気に溢れる。



【浜松市への期待度グラフ】

●おもてなしの気持ちが伝わる観光地に

会社では、参加者の満足度を高めるために、社員の専門性を最大限に活かしたおもてなしをしている。大手の旅行会社では気づかないような点にも配慮することにより、口コミで評判が広まり、スポーツ合宿の誘致は年々増加している。

初めて浜松市でスポーツ合宿を行う団体への補助があれば、リピート率も高いため、効果的である。

また、海岸や山などの観光資源に対し、清潔なトイレの設置など、おもてなしの気持ちが伝わる施設整備があると、リピート率はさらに高まり、活気あるまちになる。

田力（たぢから）　剛（つよし）さん

横尾歌舞伎保存会

［田力剛さん］
横尾歌舞伎保存会に所属。週 1 回の三味線の稽古も受けており、質の高い公演になるよう研鑽を続けている。

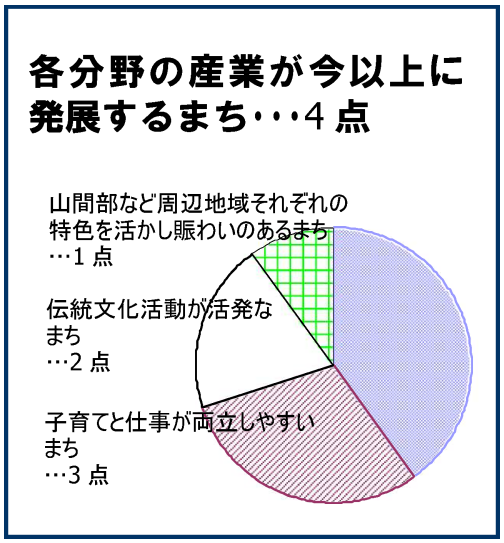
●地域の活動となっている横尾歌舞伎

横尾歌舞伎保存会は、一声かければ 20～30 人ほどの人が集まる体制にある。参加者の年代も 20 代後半から 80 代までと幅広く、また、井伊谷小学校と奥山小学校の小学生に募集をかけて少年団を結成し、秋の本番に出演してもらうなど、地域ぐるみの活動となっている。

保存会に入ってからは、地域の人の顔を覚えるようになり、話すようになったことで、自分と地域とのつながりが強くなったと感じる。また、横尾歌舞伎が高齢者の活躍の場となっており、保存会の高齢者は元気である。公演を他の地域から見に来る人も増えており、地域の活性化につながっている。

●伝統文化を引き継ぐために

農村歌舞伎を行っている保存会の中には、一度途切れたものを復活させたところもあるが、復活させた当事者が高齢化し、後継者の確保に苦労しているところも多い。横尾歌舞伎は江戸時代から一度も途切れることなく行われてきた。地域に根付いており、活動する人数も多く、後継者が不足しているということはない。しかし、師匠と呼ばれる人たちが持っている演目のうち、2～3 割程度しか実際に上演されていないため、すべての演目が相伝されないといった問題がある。古くからある横尾歌舞伎独自のかたちを残し、活動が先細りになってしまわないように、5 年以内には引き継ぎたいと考えている。



【浜松市への期待度グラフ】

●特産品のブランドを残すために

浜松市には、農業、工業などの面で様々な産業があり、特産品も多い。実家が農業をしている関係で、畑が減っていること、農業の担い手が高齢化しているなどの問題を抱えていることを知っている。特産品を育ててきた人の技術を次の世代へ伝えることができないと同じレベルのものをつくることができず、ブランドを維持できなくなってしまう。横尾歌舞伎のような伝統文化と同じように、産業についても次の世代に引き継ぐことを重視しなければならない。

立岩（たていわ）　恵子（けいこ）さん

浜松市認定農業者（立岩牧場）

浜松市農政推進委員会委員

[立岩恵子さん]
浜松の農産物は、まず一番身近な浜松市民が口にできるようになってほしいと語る。

●自慢出来るまち、浜松！

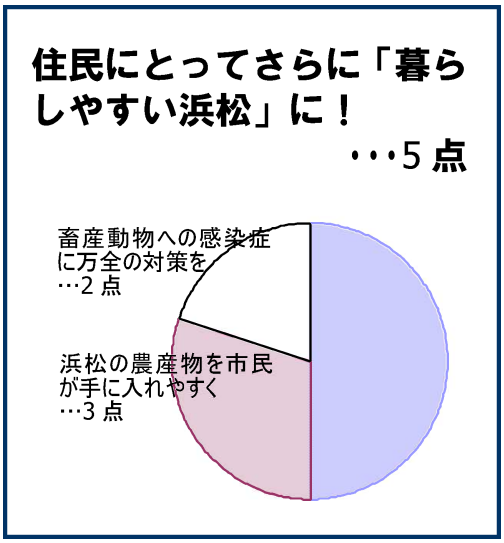
浜松は農業・商業・工業すべてが盛んに行われており、気候も温暖で自然にも恵まれている。このことは、市外から転入してきた人たちや、お客さんからもよく聞くので、浜松に住んでいることは皆に自慢が出来る。

●地元農産物をみんなが口にできるように

浜松は近年、工業に特に力を入れていることはとても良いことだと思うが、一方で農業が置き去りにされている印象がある。最近は農家自体が減少してきているが、浜松の農産物は、高品質なため需要も高く、大都市で流通したり、海外への輸出なども増えている。その反面、市内の飲食店でも比較的安価な店舗では輸入農産物に頼るところが多い。これでは、浜松市民は浜松の農産物を食べる機会が減ってしまい、健康面でも心配である。また、工場の内陸移転の動きもあるが、農業にとっても山間部より三方原のような平坦な土地の方が営農しやすい。工業は平地であれば営業できるが、農業は土を選ぶ。自然資源が多い浜松の特性を上手に利用して、浜松市民が当たり前のように浜松の農産物を口にできるようになってほしい。

●農業が持っている力

かつて戦後の食糧難の時代でも、農業の盛んな地域は何も困らなかったと昔の人たちから聞いた。実際に災害が起こった際、都会では食糧の問題が出てくるが、農業が盛んな地域や農家では、食糧の備蓄は当たり前のように行っており、災害対策の観点でも、農業者の育成は必要ではないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●「暮らしやすい浜松」を！

区協議会など、地域住民の意見を集める機会は用意されているのに、得た意見が施策に反映される仕組みが弱いと感じる。地域住民の各分野の意見を、行政がより反映できる体制づくりが必要である。

農業分野では、遊休農地があって農業を始めたい人もいるのに、それを支援できる体制が整っていなかったり、好条件の農地であるのに車が入りづらいなどの問題で、耕作規模が拡大できない土地があったりする。現場の意見を反映した施策をお願いしたい。

また、富士山の世界文化遺産登録により、海外からの観光客も増加するだろうが、人の出入りが多くなると、酪農家としては感染症が心配である。富士山静岡空港での検疫など、万全の体制をお願いしたい。

田中（たなか）　利昌（としあき）さん

ガステックサービス株式会社　四川飯店西塚店マネージャー

[田中利昌さん]
日々の積み重ねが、30 年後の理想の浜松市につながると語る。

●高まる食への安全意識

お客様の食に対する意識は変わってきている。提供する料理の味だけでなく、安心、安全を求める意識が向上し、素材にも注目が集まるようになってきた。今後もこうした意識はますます高まり、住宅の建築資材や身につけるものなどの様々な分野へ、安心、安全への需要は広がっていく。行政は明確な基準の設定が求められ、サービス、商品の提供者は基準を守りながらコスト管理を行うこととなり、官民ともに工夫が求められる。

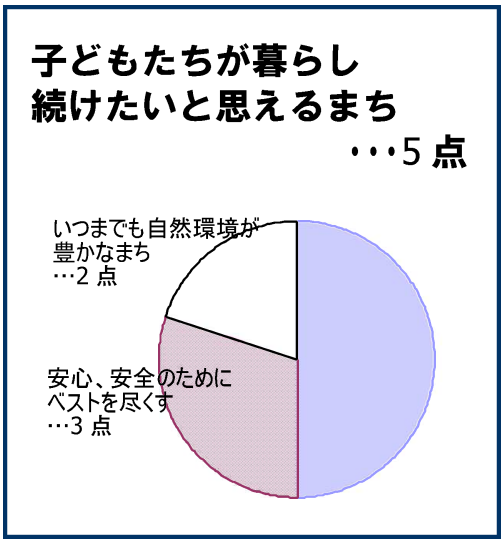
●お客様のニーズはユニフォームを脱いでから感じる

お客様のニーズを把握するためには、様々な手法がある。まずは、アンケートに回答してもらったり、スタッフが直接聞いたご意見を集約したりといった方法である。また、お客様が帰った後のお皿の状況にも、ヒントが隠れている。料理が残されていたら、味が合わなかったのか、接客で気分を害されたのかなど、考えるべきことはいろいろある。

更に重要なのは、プロとしての自分自身の感覚である。仕事を離れ、家族を連れて食事に行く時には、接客、店の雰囲気など、良い意味でも悪い意味でも、自分の店舗の参考になることはたくさんある。行政の職員も仕事を離れれば市役所からサービスを受ける市民である。サービスの受け手として、自分の仕事を客観的に見ると、仕事中とは違う見え方、発想ができるのかもしれない。

●完璧は無理でも、ベストを尽くす

公園の遊具の劣化による子どもの事故や、高速道路のトンネルでの天井落下などの報道を見聞きすると、行政には人の命を預かる業務が幅広くあると感じる。同時に、施設の経年劣化は、日常的な点検を綿密に行うことにより、事故を予防することが可能ではないかとの考えも浮かぶ。国、県、市などが関係しており、手続き等が複雑なのかもしれないし、人の行うことであるため、完璧を求めることは酷であろうが、重要な仕事をしている以上、手を抜くことなく、ベストを尽くすことを期待したい。



【浜松市への期待度グラフ】

●子どもたちが暮らし続けたいまち

幼い頃には、近所の川で魚釣りをしたり、空き地で遊んだりと、魅力的な遊び場があった。今の子どもたちは遊び方も変化しているのだろうが、30 年後の将来を担う子どもたちが、暮らし続けたいと思えるまちにしていく必要がある。まちづくりという大事業にとって、30 年はあっという間である。日々、この地域を良くしていきたいと思い続けることの積み重ねが、30 年後の輝かしい浜松市を形成すと考える。